

K250.3

1

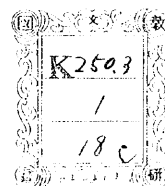
18c

文部省著作教科書

社会科 18



個人と集團生活



社 会 科 18

個人と集團生活

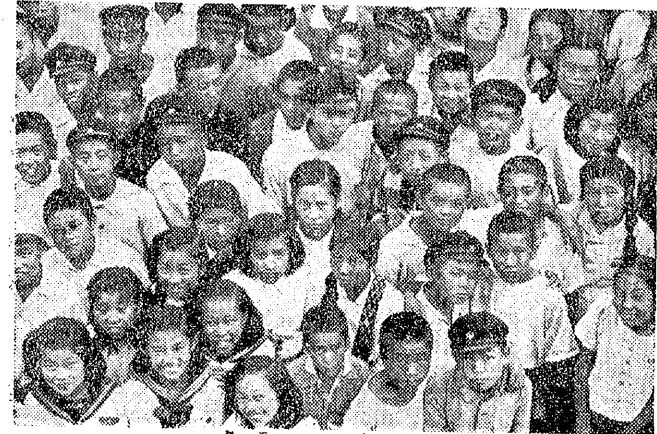
目 次

第一章 個性はどのようにして作られ発展するものだろうか.....	1
1. 個人はそれぞれみな違っている.....	1
2. 遺傳とはなんだろうか.....	2
3. しかしきみたちの性格は遺傳だけできまるものではない.....	5
4. きみたちの行動.....	6
5. 家庭生活はきみたちの性格の土台を作るのを助ける.....	7
6. 家庭のそとへ——新しい環境.....	12
7. 文化はきみたちの生活を豊かにする.....	13
8. 自然は人間の性格にどんな影響を與えているだろうか.....	17
第二章 個人はどのようにして社会生活に適応することができるか.....	21
1. なれるということ——習慣.....	21
2. 近代的な社会生活では人間は弾力的な習慣を身につけなければならない.....	22
3. 環境の変化Ⅰ——住居の移動.....	24
4. 環境の変化Ⅱ——時代は常に動いている.....	26
5. 環境の変化Ⅲ——新しい職業.....	29
6. 環境に適応できないとどうなるだろうか——不良少年少女たち.....	30
第三章 個人はなぜ尊重されなければならないか.....	35
1. エジプトのピラミッド.....	35
2. 二つの教訓.....	36
3. 人間にはがまんのできることとできないことがある.....	38
4. 人間は基本的な要求が満たされなければ人間らしく生きて行けない.....	39
5. 基本的人権はこのような要求にもとづいている.....	43
6. 社会はだれのための社会なのだろうか.....	44
7. 人間の行動にはいろいろの型がある.....	47
第四章 きみたちはどのようにして共同生活のために活動することができるか.....	50
1. きみたちの前途には無限の活動の領域が横たわっている.....	50
2. 人間は長い間自然と戦って来ている——文明と発見の歴史.....	52
3. 人と人との関係は調和的にならなければならない.....	55
4. 不和の原因を除くためには——Ⅰ愛する努力が必要である——しかし愛情は万能ではない.....	56
5. 不和の原因を除くためには——Ⅱ利益の分配を公平にしなければならぬ.....	58
6. 不和の原因を除くためには——Ⅲお互に無知であってはならない.....	60
7. 正義と寛容.....	62

第一章 個性はどのようにして作られ発展するものだろうか

1. 個人はそれぞれみな違っている

きみたちのクラスの友だちを見たまえ。だれひとりとして全く同じ人はいない。太ったものもいれば、やせたものもある。背の高いもの、低いもの、からだの強いもの、弱いもの。意志の強いものもあれば、だらしない人間もいる。おどけた人や内気な人。勉強の好きな人、嫌いな人。ひとりで本を読んだり、機械をいじったりすることに熱中しているものがあるかと思うと、みんなで野球をやることばかり考えているものもある。みんな違った顔つき、違った性質、違った趣味、違った才能。



クラスの友だち
(違った顔、違った個性)

町に出てみよう。おおぜいの人が歩いている。町を歩く人たちは、クラスの友だちどうしがお互に違っているよりも、もっとお互に違っている。身体ががっしりして元氣よく歩いている警官、早口にしゃべ

りながら急ぎ足で通りすぎる商賣人、白いカラーにせびろですまして歩く会社員、やさしい目をして子どもたちにあいさつする小学校の先生、赤ちゃんを抱いて通るお母さんもいる。生まれたばかりの赤ん坊はどれを見てもどこか同じようだが、よくよく見れば、やはりみな違った顔つきをしている。……

どうしてこんなに人間はひとりひとり違うのだろうか。なにからなにまで同じという人は世界中探してもいまい。きみはきみ、わたしはわたし、先生は先生、あのひとはあのひと。決して間違えることはない。どうしてこんなに違うのか、きみたちは考えたことがあるだろうか。

2. 遺傳とはなんだろうか

赤ん坊のまわりに、うちの人たちがみな集まる。額の広いのはお父さんに似ている、鼻はお母さんに似ている、口もとはおじいさんにそっくりだ……など、みなで話し合っている。確かに赤ん坊はどこかお父さんやお母さんに似ているものだ。赤ん坊だけではない。やせて背の高い友だちのうちに遊びに行ってみたまえ、やはりやせて背の高いお父さんか、お母さんが出て来ることがあるだろう。子が両親に似るのは遺傳のためだという。なるほど子どもはからだつきから性格まで両親に似ているように見える。しかし子どもが両親に似るのは、なにからなにまで遺傳のためだろうか。そしてある人がこんなからだつきをし、ある性質を持ち、ある才能に恵まれているのは、なにからなにまで遺傳によるのだろうか。しかしこのことを研究する前に、まず遺傳とはなんであるかを調べてみよう。

新しく生まれる子どもたちは、さまざまの肉体的、心理的な特色を両親から受けつぐばかりでなく、表面には現われなくてもさまざまな遺傳質を両親から受けつぐ。このことを遺傳というのである。それぞれ両親の持っているさまざまの性質のうち、どのような性質が必ず遺

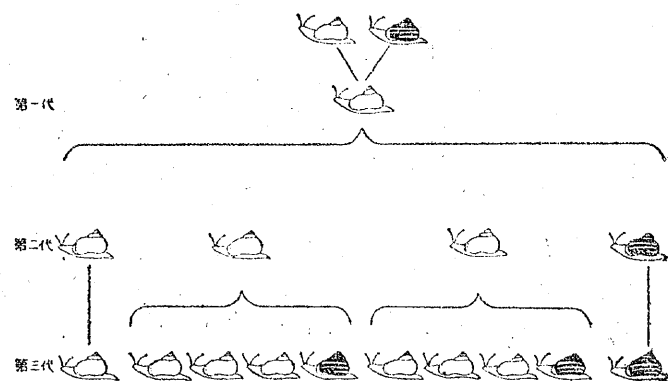
傳するのだろうか。それについてはまだなにからなにまではっきりわかっているわけではない。ただ、たとえば後天形質は遺傳しないということはわかっている。後天形質というのは人が生まれつき持っている性質ではなくて、出生後経験によって身につけた性質のことである。たとえば父親が事故で片足をなくして義足をはめていても、生まれる子どもの両足は健全である。中華民国では以前に、「てん足」といって、婦人が足の先を小さくしる習慣があったけれども、それを何代くりかえしても、小さい足の女の子が生まれることもない。また父親が数学者だからといって、その子どもが生まれつき数学がたっしやであるとは限らない。それではどんな性質が遺傳するのだろうか。たとえば純粋な場合の眼や毛髪や皮膚の色、色素欠乏症、あるいはある種類の病氣、たとえば少数の精神病とか、ある種の皮膚がんおよび脳腫瘍、眼瞼下垂症、白内障（そこひ）とかである。けれどもすぐにきみたちに疑問が起らないだろうか。かりに父親が純粋の黒い眼で、母親が純粋の青い眼の場合、その間に生まれる子どもはどんな色の眼をしているだろうか。これには一定の規則がある。すなわちこの場合では黒い眼の色のほうが、外に現われるのであって、黒い眼と青い眼の両親からは、黒い眼の子どもが生まれる。こういう外に現われる遺傳の性質を優性といい、かくれる性質を劣性といっている。また、その性質

第 一 表

組合せ番号	両親 (父も母もそれぞれその両親から遺傳子を受けついでいる)	子 ども
1	AA + AA	AA, AA, AA, AA.
2	AA + BB	A(B), A(B), A(B), A(B).
3	AA + A(B)	AA, AA, A(B), A(B).
4	A(B) + A(B)	AA, A(B), A(B), BB.
5	A(B) + BB	A(B), A(B), BB, BB.
6	BB + BB	BB, BB, BB, BB.

Aは優性遺傳子
Bは劣性遺傳子
()は表面にでない遺傳子

を子孫に伝える要素を生物学者や心理学者は、染色体にある遺伝子とよんでいる。しかし青い眼の遺伝子は劣性ではあっても、そのまま消えてしまったのではない。その子孫のうちに再び現われてくることも



かたつむりの両親と子どもたち（遺伝の法則）

ある。第一表がその詳しい規則である。Aは黒い眼で、Bは青い眼であるとする。この場合 A が優性で、B が劣性である。さて黒い眼をしているものにも二通りある。父からも母からも黒い眼の色の遺伝子を受けつくだものは AA である。しかし黒い眼のものでも、父か母

第 二 表

性 質	優 性	劣 性
血 液 型	A B	O
味 覚	正 常	味 覚 盲
眼 の 色	黒	青
毛 髪 の 色	有 色	色素欠乏
色 覚	正 常	ある種の色盲
頭 髪 の 数	正 常	は げ
皮 膚 の 色	暗 黒	淡 色

か、その一方から青い眼の色の遺伝子をもったものもある。かれは雑種で、A(B) なのである。かれは表面は黒い眼をしているけれども、青い眼の色の遺伝子を持っている。こ

れだけわかれば第一表の意味もよくわかるだろう。また第二表は優性と劣性の遺伝子の例である。

困ったことには、人間の病気のうちには、遺伝するものがある。優性の病気の遺伝子を持っている人が結婚すれば、生まれる子どもはその遺伝子の中にそういう性質を持つようになる。劣性の遺伝子でも、同じ劣性の遺伝子を持っているものどうしが結婚すると、その子どものあるものにはこの劣性の遺伝子が表面に出て来ることがある。不具が実際に遺伝する例として（ある種のこびと等）いとこどうしの結婚によって、時々不具者が出たりするのはこのためである。

第三表 遺伝する病気の主なもの

ある種のアレルギー	(優 性)
み つ く ち	(劣 性)
ある種の筋肉障害	(優 性)
血 友 病 (母性を通じて)	(劣 性)
白 内 障	(優 性)
色 素 欠 乏 症	(劣 性)
ある種の皮膚がん	(優 性)
眼 陰 下 垂 症	(優 性)
少数の型の精神病	(劣 性)
低 能	(劣 性)

3. しかしきみたちの性格は遺伝だけでき

まるものではない

ところで現在のきみ

たちの性質はどれもこ

れも両親から受けつい

だものだろうか。山田

君は野球が上手だが、

山田君のおとうさんは今までに野球をしたことも見たこともない人かもわからない。両親は非常にやさしい人なのに、子どもは怒りっぽくて短気であることもある。これだけでもわかるように、人の性質は決して遺伝だけできまるものではない。それでは一体なんによってきまるのだろうか。人間の性質は遺伝によると同様にその人の置かれている境遇によって作られるということには心理学者の意見は一致している。遺伝だけで人間の性質はきまらない。環境の力がこれに加わるのである。

もちろん性質によっては遺伝の方のほうが強いのもある。たとえば日本人はヨーロッパやアメリカに生まれてもやはりその毛の色や眼

の色に変わりはない。それは、ひじょうに長い期間ではともかく、環境の力ではどうにもならない。ところが、反対に環境の力のほうが強い場合がある。大ざっぱに言えば、身体的な特徴は遺傳するものが多く、知能もいくぶんか遺傳すると考えられる。しかしものの考え方、善惡のきめ方、他人に対する態度などは主として環境の影響によって作られると考えてよいだろう。

生まれつききまっているものに性の区別がある。男女の生理的な区別は普通の環境の力ではどうすることもできない。しかしそういう身体的な区別は別問題として男らしい性質とか女らしい性質とかいわれているものは、すべて生まれつきのものだろうか。たとえば女子はある点では男子より肉体的に弱いといわれる。だから女子はいつでも男子に服従しなければならないし、また生まれつき服従的な性質を持っているといわれるが、それは間違いである。またきみたちのなかには、お化粧などするのは女子の生まれつきの性質だと考えているものがあるかもしれない。しかし、未開社会の種族のうちには男子のほうが身のまわりを飾ったりするものがある。そしてかなり最近まで進んだ文明社会でさえもそうであった。また、男の子と女の子とでは、生まれた時から與えられるおもちゃでさえ全く違っているではないか。このことが子どもたちの柔い心にどんなに深い印象を與えているか想像してみたまえ。このようなことだけからでも、男女の性質の中には、むしろ環境の力によって作られるものが多いことがわかるだろう。

4. きみたちの行動

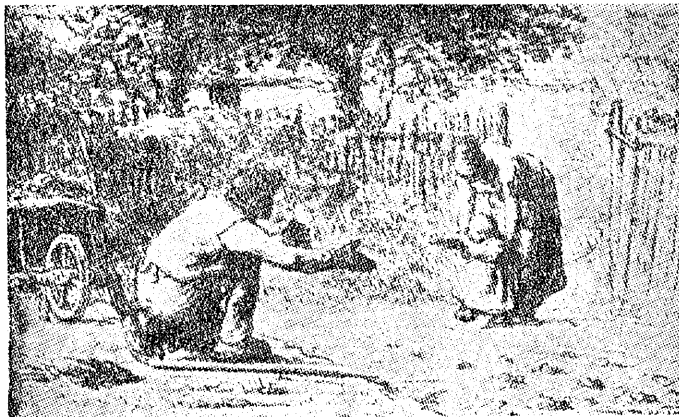
きみたちの行動には、教えられず生まれつきできるものと、教えられ、学び、練習してはじめて覚えたものとの二通りがある。赤ん坊は教えられなくても呼吸をしている。しかし日本語を話すことは、教えられ、まねをしてはじめてできるのである。生まれつきできる行動で、本能的行動といわれるものもある。きみたちはよく「本能的に」とい

うことばを聞くだろう。しかし実際には人間の行動で純粹に「本能的」なもの少ない。本能的行動といわれるものにも、たいていいくぶんかは習い覚えた経験が入りまじっている。たとえば生まれたばかりの赤ん坊が最初に母の胸にすがって、乳をのむのはいわゆる本能的な行動だろう。しかし二度目の時からは、赤ん坊はもう最初に乳をのんだ時のことを覚えていて、その経験がかすかながらいわゆる本能的行動のうちにはいつているに違いない。このように生まれつきか本能的とか考えられるような赤ん坊の性質も、なにからなにまで生まれつきのものではなくて、むしろ経験によって学び覚えたものが多いのである。赤ん坊が次第に大きくなって、人の顔の区別もできるようになると、ひどく「人見しり」する子ができて来る。知らない人が近づくと、泣き出したり、恥ずかしがったりする。これは決して生まれつきの性質ばかりではない。よく調べると、いろいろな経験によって「人見しり」するようになるのである。一例をあげれば、赤ん坊にとって最初の來客が荒々しかったりすると、それから赤ん坊は見知らない人をこわがるようになることもある。またこれは別の例であるが、子どもが虫などを嫌い恐れるようになることがある。子どもが虫などをこわがるのは、おそらく、なにかの時におとなが虫を恐れているのを見たり、直接に虫からさされて痛い目にあったりしたことを覚えていて、そういう心の状態になってしまうのだろう。生まれて2年6箇月ほどたったある子どもが、小さい虫のはうのを見て、こわがってあとすさりしていた。そこで父親が「かわいい虫だ」と手にとりあげて見せたところが、子どもはそれから虫を平気でいじるようになったという。このようにわれわれの行動や性格は、環境からさまざまな経験を学ぶことによって一番強く影響されるのである。

5. 家庭生活はきみたちの性格の土台を作るのを助ける

環境からの影響のうちで一番注意しなければならないのはなんだろう

うか。なによりもまず家庭の中での経験である。幼い子どもの環境は大部分家庭にある。きみたちは「三つごの魂百まで」ということわざを知っているだろう。このことわざは正確でも科学的でもないが、そ



歩きはじめ ミレー作

(あたたかい両親の愛情、この家庭から子どもは社会に向って歩きはじめる。)

ねは、小さい時の子どもの経験がひじょうにたいせつなことを強調したものである。子どもの魂は家庭の中で作られるのである。家庭生活は團らんと休息の場所であるが、それと同時に、とくに子どもにとっては、自分の性格を伸ばして行くのに、最もたいせつな環境である。一口に家庭生活というけれども、一つ一つの家庭を調べてみたまえ、なんというさまざまな型や氣風があることだろう。子どもという立場からこの家庭生活を眺めてみよう。まず家庭を作っているのはどんな人たちだろうか。両親のそろっている家族、どちらかがかけている家族、兄弟姉妹の多い家族、少ない家族、子どもがひとりしかない家族、祖父や祖母もいっしょにいる家族、親類や手傳いの人々のいる家族、まだまだいろいろな場合が考えられる。そしてそれぞれの家庭の氣分は少しずつ違うのである。また父親の職業も知らず知らずのうち

に子どもに影響する。日本の農家の子どもは普通知らない人に対しては無口であるが、商業をしているうちの子どもはおそらく人づきあいがよくなる機会が多いだろう。両親の教育程度も子どもに敏感に影響する。それは高いほうが子どもに有利であるように思われる。しかし場合によっては、両親があまりこまかく子どものしつけのことに熱中しすぎて、かえって子どもを神経質にすることもある。

なによりも子どもに一番強く影響するのは、両親の性格とその家の氣風である。やさしい両親、きびしい両親、たいていのことは放任しているけれども注意深い両親、ほったらかしの両親、なんでも口出しする両親。やさしすぎるとどうなるか、きびしすぎるとどうなるか、ほったらかしているとどうなるか、きみたちの周囲にも無数の実例があることだろう。來客でいつもにぎやかなうち、近所のつきあいもしない寂しいうち、生活のための苦しみでいっぱいになっているうち、お互に思いやりのあるあたたかいうち、世間でいばかり考えているようなうち、愛情もうるおいもなくお互がなんとなくげとげした氣持でいる冷たいうち、人生は楽しく明るくすごすほうがよいと考えているうち、どんな娯樂も罪惡のように考えているうち、自分たちのうちのことばかり考えて、よその人たちのことは全然考えない利己的なうち、宗教に関心を持っているうち、宗教に全く無関心のうち、このような千差万別の家庭の氣風のうちで育てられる子どもが、そのさまざまの氣風からどんなに強い影響を受けるか、想像してみたまえ。きみたちはどんな家庭を一番理想的なものと考えているだろうか。

幼い子どもたちは家庭生活の中ではじめて人間生活の第一歩を経験し、將來の社会生活の準備をする。そこで家庭で養われる習慣や性格は、將來の社会生活にとってひじょうに大きな意味を持っている。子どもたちは家庭の中ではじめて社会生活のいろいろの約束を覚える。たとえば子どもたちは家庭でことばを覚える。このことばこそは人間

が人間らしい生活を営むための一番たいせつな道具である。そのほか子どもたちは社会的な態度や礼儀を覚えて行く。父母にあいさつできるようになれば、近所の人たちにもあいさつするようになる。兄弟に親切なものは普通友だちにも親切になる。またどの家庭にも、近所の人、親類、お客、子どもの友だち、病氣の時には医者や看護婦、品物や郵便や電報を配達してくれる人たち、電燈や水道やガスを調べに来る人たちなど、いろいろな人がやって来る。うちのものは、その人たちに対して、いろいろな態度やことばづかいで應待することだろう。幼い子どもたちはそれを見ているうちに、次第にうちの人とよその人との区別、よその人に対して取るべき態度や礼儀作法などを覚えて行く。もし父親や母親が不用意に、よその人に対して軽べつしたような態度をとると、子どもたちもその人を見くだすようになる。このようにして小さな子どもたちにも社会的な地位の上下について、誤った偏見が植えつけられるだろう。

わが國の場合とくに注意しなければならない問題がある。それは今までの家族の氣風がどんなものであったか、そしてそれは將來どのように変化して行くだろうかという問題である。きみたちはすでにわが國の家族制度についていろいろと學んで來ただろう。大ざっぱにいうと、家族には家族のつながりのどこに價值をおくかという点で二つの型があるといえよう。一つは祖先から自分、自分から子孫へと、家の連続をひじょうにだいせつに考える家族であり、もう一つは夫婦を中心として考えて、家の連続についてはそれほど強い関心を持っていない家族である。學問的には、はじめの家族を家長的家族、あとの家族を近代的家族といっている。わが國の今までの家族は家の連続ということを尊重する家長的家族が多かった。家長的家族では、家業は親から子へと受けつがれ、長男は結婚しても両親といっしょに生活し、家長は家族員に対し、相当大きな権力を持っていた。しかし明治維新以

後その型が次第にくずれてきた。家業も子どもに受けつがれない場合がふえ、両親と子ども夫婦と別居する場合も多くなった。家長中心の家族制度の力が弱くなってきたのである。ことに新憲法によってこの傾向はさらに強くなるだろう。このことは家庭の中で育つ子どもにも敏感に影響する。家長中心の家族では子どもにはきびしい服従が要求



祖先と子孫たちの家庭

された。家風が重んじられて、今までの家族の習慣からはすれないように育てられた。そのため子どもは自分の人格について十分自覚することができず、また自分の最もよい判断にもとづいて行動する習慣がうまく養われなかった。しかし家長中心が弱くなると、子どもはのびのびと自分の個性をのばすことができるようになり、親子の関係もいっそう人格的になるだろう。両親は自分の考えを子どもにおしつけるよりも、子どもの希望を十分に取りいれるようになる。子どもが成長すると両親は子どもに命令せず、むしろ子どもの相談相手になる。このような家庭では、明るく、自由な、なにごとでも自分で考え、行動できるような子どもが育って行く。しかしこの反面両親が誤った自由放

任主義で子どもを甘やかすと、子どもはわがままで無責任な性格となることがある。

6. 家庭のそとへ——新しい環境

「ひとりっ子は問題の子である」といわれることがある。それはかれがあまり家庭でたいせつにされすぎるために、わがままに育つことがあるからである。しかしこれはひとりっ子の問題だけではない。もし子どもたちがいつまでも家庭の中だけで成長するならば、かれは社会に出てもうまく社会生活に適應できないような性格になるだろう。しかし子どもたちはやがて家庭とは違った新しい環境にはいって行く。第一にかれらは学校の門をくぐる。

学校は家庭とはいろいろな点で違っている。子どもたちはいつも甘えてばかりいることはできない。同じ年齢のものが何十人となく集まっていて、その何十人という友だちがみな違った性格を持っている。この友だちと交わるうちに、各人の性格が急に成長して行く。のちに社会人として世の中に出る時に必要な性格が学校時代に養われるのである。友情、責任、規律、勤勉、注意力、協同、指導と服従、創意、忍耐、正直、寛容——このような性格が、どんなふうにして、学校で作られて行くか、一つ一つについて考えてみたまえ。そして家庭では養われにくい性質が学校ではなぜうまく養われるか考えてみたまえ。

さらに子どもたちは成長するにつれて、もっとさまざまな新しい環境を経験する。近所の人たちとのつきあひもその一つである。そして子どもたちは次第に、この世の中では、どんな人やどんなことが尊重され賞讃されているか、反対にどんな人やどんなことが軽べつされ、非難されているかを敏感に学び取る。そして自分もまた尊敬され賞讃されたいと願うようになる。きみたちもたとえば愛情にあふれた人の前に出れば、自分もまたそのようになりたいと思うだろう。勇気のあ

る人の前に出れば、自分が臆病ものだとは思われたくないと思うだろう。このように個人が交わる人々の種類によって、個人の成長には大きな影響が與えられるのである。

最後にとくに注意しなければならないことがある。それはきみたちが現在少年少女時代から青年時代への轉換点に立っているということである。青年時代——きみたちは今や身心ともに成熟しつつある。きみたちは知的にも感情的にもはや子どもではない。藝術品や文学作品の美しさをさらに深く知るようになる。また鋭い良心がめざめ、不正や不義がまんできなくなるようになるだろう。それと同時に感情的な動搖がはげしくなり、時には極端な行動をしたりするものも出て来る。きみたちの年齢は一種の危機の時代であるが、同時に人生に於て最もたいせつな、最も豊かな、最も尊重されなければならない理想主義の時代である。この時代に作られるきみたちの性格は、これからのきみたちの生涯にひじょうに大きな意味を持つようになるだろう。生まれてから5〜6才までが人間にとって最初の性格形成の時期であるとすれば、きみたちの年ごろはそれに続く性格形成の時期である。そしてこの時期には、きみたちの性格は最初の時期とは違って、家庭などだけの影響ではなく、もっと廣い世界からの影響を受けるのである。

7. 文化はきみたちの性格を豊かにする

しかし人間の性格は、直接ほかの人と接触することだけで作りあげられるものではない。人間は文化を持っている。文化は今生きている人たちばかりではなく、すでに死んでしまった人たちの共同の努力でできた人類の遺産である。

文化のうちでも人間にとって一番たいせつなもののひとつはことばと文字である。ことばと文字がなかったならば人間は自分の氣持や経験したことを、仲間や子孫に十分に伝えることはできなかったに違いない。アメリカに生まれた偉大な女性ヘレン＝ケラーの物語はこの

ことをはっきりと教えている。生まれて 18 箇月後に、かの女の目は見えなくなり、耳は聞えなくなった。かの女は七つになるまで、あらゆるものに名前がつけられていて、この名前によってお互いの経験を伝え合うことができるということを知らなかった。ある朝のこと。かの女の先生のサリバン嬢がかの女を井戸のそばにつれていった。そしてヘレンにコップを持たせ、その手をポンプの下に出させた。それからサリバン嬢はポンプを押した。冷たい水がコップにあふれた時に、サリバン嬢はヘレンの片一方の手に



ヘレン=ケラー

に WATER と書きつづった。手にあふれる冷たい水の感じ、それと同時にもう一方の手に書かれた文字——ヘレンははっと驚いて、コップを手から取り落とし、釘づけにされたように立っていた。新しい光がかの女の顔に輝いた。かの女は WATER という字を何度も書いた。それからかの女は地面の名を聞き、ポンプの名を聞いた。それから突然向きなおってサリバン嬢の名を聞いた。サリバン嬢は、TEACHER と書いた。家に帰る途中ヘレンは手にふれるすべてのものの名を学んだ。そしてひどく興奮していた。このようにしてことばを学ぶことによって、ヘレンの人間性は急に成長して行ったのである。

ことばは個人にばかりでなく国民全体の性格に大きな影響を与えている。たとえば日本語の代名詞はひじょうに複雑である。自分のことをいうのにも、わたくし、わたし、あたし、あたひ、ぼく、おれ、自分、手前、せっしゃ、余、わがはい、などとひじょうにたくさんある。相手の人に呼びかけるのにも、あなた、きみ、お前、貴様、などいろいろある。これに対して英語では、自分のことはいつでも I といい、



一人称の使いわけ（これでよいだろうか？）

相手のことは、you という。これは單にことばのいいまわしが簡単であるとか、複雑であるとかいう問題ではない。日本語では、いつでも時と場合と相手の身分に應じていい方を変えなければならないのである。日本語の代名詞や敬語の複雑さは、日本人の人間関係の複雑さと切っても切りはなせない関係にある。このため複雑なことばがあるかぎり日本人はいつでも身分の上下について敏感でなければならず、その性格もいっそう複雑になるのである。しかし、社会自身の変化とともに時がたてばことばにも変化が起るだろう。

さらにわれわれの性格は、われわれが使う道具や技術によっても影響される。時計のなかった時代には、今ほど約束の時間をきちんと守るという習慣はなかっただろう。石けんのなかった時代には、今ほどみなが清潔でなくても、お互に平氣だっただろう。また人間が職業用に使う道具や機械によっても、その性格はだんだん変って来る。精巧な機械を使う人々の性格は少なくともこの機械を扱う場合には科学的にち密になると考えられる。またさらにその人の職業全体もその人の性格に大きな影響を与えるだろう。土地を相手にしんぼう強くはたらく農民の忍耐強い性質、社交的な仕事をしている会社員の輕快な性

質も注目されるだろう。そういう性格を職業と結びつけて見たり、仕事の人格におよぼす影響や、いろいろな職業に従事する人の型や人となりを見るのもおもしろいことだ。また映画、新聞、雑誌、ラジオなどが普及した結果、きみたちの行動にはどんな変化が見られるようになったらうか。あるいは飛行機や汽車や電車や自動車が發明されてから、どんなに人間の性格が変わったことだろう。人間の生活のテンポは万事について早くなった。よくいえば人間は前よりも活動的になり、悪くいえば氣ぜわしい性格になって來た。しかし交通機関が発達した結果のうち、なによりたいせつなことは、人々が簡単に遠い都会やあるいは外國などに旅行して、違った人情や風俗に接触することができるようになったことである。その結果人々は人類の生活を今までよりずっとよく理解するようになり、それにつれて次第に心が廣くなり寛容の精神が強まって來た。

外國語を知らないものは自國語を知っているとはいえないとドイツの詩人ゲーテはいつているが、同じように外國を知らないものは、自分の國を十分に知ってはいないといえよう。よく外國のことを知れば自分の國のよいところと悪いところを自覚するようになり、むやみに外國のことを悪くいたり、憎悪したり、軽べつしたりすることがなくなるだろう。

きみたちのうちには音楽や絵画や文学の好きな人も多いだろう。偉大な藝術に親しむ機会をできるだけ多く作りたまえ。藝術の魅力に一度とらえられた人は、それだけでこの世に生まれてきたかいがあったとを感じるだろう。フランスの思想家ルソーは最もよく生きるとは最も長く生きることではなくて、最も深く生きることであるといっている。最も深く生きる最善の方法は、人類の最高の文化遺産に常に接することである。その意味で偉大な宗教も人間の性格に強い影響をあたえる。きみたちはなにか宗教を信じているだろうか。きみたちの両親はまた

きみたちの祖父や祖母は宗教を信じているだろうか。強い信仰を持っている人たちの行動や性格を注意して観察してみたまえ。宗教を信じていない人たちとは、やはりどこか違ったところがあるだろう。またいろいろの宗派の違いやその宗教の団体の信仰を実際に実践する程度に應じて、それを信ずる人たちの性格も違って來るものである。

8. 自然は人間の性格にどんな影響を與えているだろうか

夏のひどくむし暑い午後、あまり元氣もなくなって、しばらくからだを横にして晝寝でもしたくなるというようなことは、だれでもが経験したことであるに違いない。しかしもし一年中こんな氣候が続いたら、人間はどんなになるだろうか。溫帯から熱帯に移住した人が次のようなことをいつている。最初は郷里にいた時と同じように働き、氣候も氣持よく感じ、時にはひじょうに勤勉になることさえある。しかし、しばらくすると、たとえ病氣にならなくとも、次第に動くのがいやになり、はげしい労働に堪えられず、向上心もなくなってしまふという。またひじょうによい氣候でも一年中ほとんど変化がないと、働く元氣がなくなることがあるらしい。「バハマ島は世界中でも最良の氣候のところで、最も健康に適し、われわれはほとんど病氣にかからない。ただ一つの欠点は人に労働を好む氣持を起させないことである。」と語った人がある。これに対してわが國の氣候は四季の変化に富んでいる。また氣候は大体溫和であるけれども、時には風や雨や雪などによって大きな被害を受けることもある。それで人はそのような天災に対抗しなければならなくなる。わが國民が比較的勤勉であるのは、このような氣候風土の影響であるという人もある。このようなことからだけでも想像できるように、われわれの性格は自然の影響を受けている。たとえば果てしない大平原、その平原をうるおしている大川、常に白雪をいただいている神秘的な山脈、洋々とした海洋、そのようなものは常にこれに接している人たちの性格になにかの影響を與

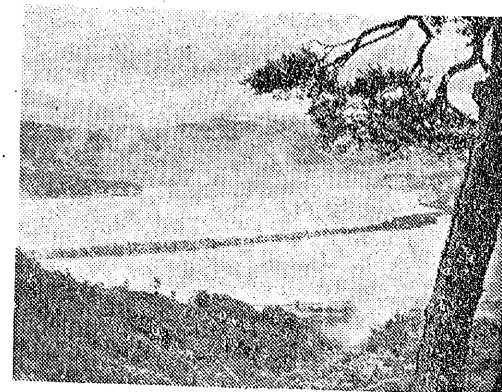


自然環境と生活

えないだろうか。あるいは恵まれすぎた天然の資源、その逆に不毛でひどく貧しい資源、温和な気候、大陸性の気候、湿地、乾燥地、そのようなものもそこに住む人間の性格と無関係ではあるまい。

しかし自然環境は大抵の場合絶対的に行動に影響するものではない。それは人間が自然に服従し、抵抗し、自然を利用し、変形して生活しているからである。気候や地勢や資源や地理的位置などは、その土地の産業に大きな影響を與えるだろう。産業の発展は次には社会の組織や文化に強い影響を與えるだろう。そして人間は、産業や社会組

織や文化によって強く影響されるのである。そこで自然は直接にはなく、むしろ間接的に人間の性格に影響している場合が多いといつてよいだろう。



天の橋 (自然美Ⅰ)

もちろん個人的には自然の中で生活することをひじょうに好む人もいる。自然の美しさのうちにとけこんで、ただひとりで山や森の中を歩きまわることの好きな人たち、木や草や花や、獣や鳥や虫に限りない愛情を感じる人たち、西行や芭蕉のように、ワーズワースやソロのように、自然を愛し、自然を歌う詩人たち。しかしそのような人々の愛した自然は、決してただむき出しのままの自然ではない。そのような人々は、かれらの生きていた時代の社会や文化から影響を受けてい



白馬連峯 (自然美Ⅱ)

るうちに敏感な感覚が養われ、自然のうちに心のやすらかさとなぐさめとを発見したのである。自然の美といわれているものも、むしろ人間が作り出し

たものである。イギリスにターナーという有名な風景画家がいた。かれはロンドンの霧を印象的に美しくかいていた。そしてロンドンの人たちはこのターナーの絵によってはじめてロンドンの霧の美しさに眼ざめたという。わが國では昔は箱庭のような美しさが好まれた。天の橋立などその一例である。しかし今では日本アルプスのような雄大な風景のほうが愛されるようになっている。天の橋立や日本アルプスは今も昔も変わりはない。変わったのは日本人の眼である。すなわち日本人の性格そのものである。その日本人の性格は、おもに社会的文化的環境によって変化したものなのである。

研究すべき事項

1. 家庭生活は個人の性格にどんな影響を与えるだろうか。あらゆる場合について討議し、討議の結果、明らかにしたいいろいろの影響を表にまとめること。
2. 学級のものたちの趣味の調査を行うこと。趣味と性格との間にどんな関係があるだろうか。趣味を向上させることによって、性格を変えることができるだろうか、討議すること。
3. もしきみたちが学校に行かなかったら、現在のきみたちはどんなふうになつていただろうか。学校はきみたちの行動や性格にどんなよい変化を与えることができるだろうか、表にしてみる。
4. 近代的な大規模な機械文明は人間の性格や行動にどんな変化を与えたか。また機械文明の時代には、どんな性格や行動が好ましいと思われるか。学級で話し合つて、好ましい性質の表を作ること。
5. 國民性とはどういうものだろうか。それは、どういうふうになつて来たか。それは時代によってどんな変化を受けるだろうか。歴史の書物を読んだり、先生と話し合ったり、その他の方法で、國民の自國民や他國民に対する好ましい態度はどのようなものかについて理解すること。
6. きみたちの住む地方の人たちの特徴について他の地方の人々と比較して、研究すること。なぜそういう特徴が作られたのだろうか。それはすべてよいものだろうか。もしそうでなかったら、どうしたらそれを改善することができるだろうか。よい方法について討議すること。

第二章 個人はどのようにして社会生活に適 應することができるか

1. なれるということ——習慣

きみたちはまだ一度も行つたことのないうちに行けば、きっと固くなるだろう。また新しい学校に轉校すれば、しばらくはきゅうくつな感じがするだろう。人間はなじみのない人たちの中にはいると人から笑われはしないか、妙に思われはしないかとひどく神経質になる。そして自分の一挙一動が人からじろじろ見られているような気がするものである。たとえていえば、なれない新しい環境は、着なれない新しい上衣のようなものである。大きすぎても小さすぎても氣にかかるのである。しかし人間はなにからなにまで意識的に行動することはできない。意識的に行動するとは、神経を緊張させ自分が今なにをしているかをいつでも反省しながら行動することである。ところがいつもそのように行動していたならば、神経が疲れて、しまいには病気になるだろう。

きみたちの日常の行動の大部分は、もっと無意識的であり、もっと習慣的である。きみたちはいつもどちらの足から靴下をはくか、即座にいえるだろうか。たぶん答えられないだろう。中には実際にやってみなければわからない人もあるだろう。このことは靴下をはく動作が全く習慣的になりきっている証拠である。生まれたばかりの赤ん坊も、しばらくするとすぐにいろいろな習慣を身につける。習慣はものの考え方や感じ方や行動の仕方の型である。その型のおかげで、ひとは能率的にまた正確にものを考えたり、行動したりすることができる。さて環境や生活條件が変化すれば習慣もまた変化しなければならない。ところで古い習慣をすてて新しい習慣をつけるのはなかなか苦しいことである。たとえば朝寝をやめて早起きの習慣をつけることや、おと

なであればタバコや酒をのむことをやめることが苦しいように。しかしその苦しみを避け、あるいは新しい環境からいつとも逃げていたのでは、いつまでたっても新しい習慣を獲得し、新しい環境に適應できない。新しい習慣を身につけるには、古い習慣をすっかり捨ててそのかわりに新しい習慣を作り、強い決心を持ってやって行くのが最上の方法である。朝寝をやめることを決心したら、どんなことがあっても、決して例外を許さずに、毎朝早く起きてみたまえ。そうすればおしいには必ず早起きの習慣がつく。しかし一度悪いくせがつくとなかなかおらない。悪いくせはたとえていえば新しい紙に曲った折目をつけるようなものである。あとからまっすぐな折目をつけようとしても、曲った折目にじゃまされてなかなかうまく行かない。それよりも最初からまっすぐな折目をつけるほうが賢明なやりかたである。

2. 近代的な社会生活では人間は弾力的な習慣を身につけなければならない

人は習慣によって社会生活に適應して行く。社会のしきたりが、そのまま個人の習慣となると社会と個人との間のまさがなくなるのである。しかしさまざまな理由から近代的な社会生活では、人はうまく社会環境に適應できない場合が起ってくる。その一番大きな原因は、現代のように社会的變動のテンポがはげしい時には、環境がすっかり変わったり、個人の運命が急激に変化したることが多いからである。

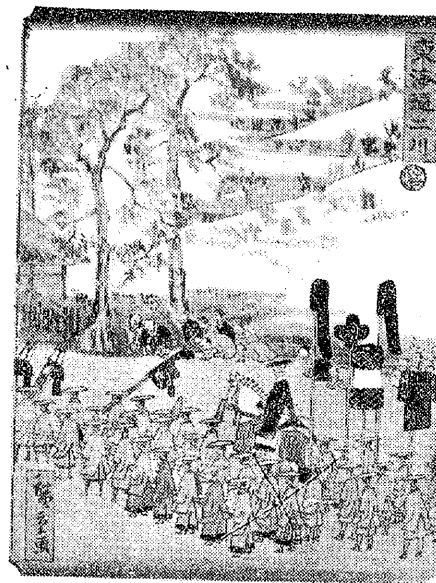
封建時代には人の運命は出生と同時に決められていた。家の職業が世襲だったので、多くの人々は生まれてから死ぬまで大体同じ環境の中で生活して



福沢諭吉

いた。福沢諭吉は^{よくざわのりあ}このことを、自分の生まれた九州の^{なかつ}中津藩を例にとって、次のように述べている。

「中津は封建制度でちゃんと物を箱の中に詰めたように秩序が立っていて、何百年たってもちよつとも動かぬという有様、家老の家に生まれたものは家老になり、足輕の家に生まれたものは足輕になり、先祖代々、家老は家老、足輕は足輕、その間に挟まっている者も同様、何年



大名行列と庶民 江戸時代

たつてもちよつとも変化というものがない。」こんな時代では、個人は自分の個性を思う存分伸ばすことができなかつたかわりに、一度自分の定められた運命を甘受したものは、変化しない環境に適應した習慣を身につけさえすればそれ

でよかった。しかし、今ではきみたちは 学校を卒業してから自分で職業を選ぶことができると同時に、自分から進んで新しい環境に適應しなければならないことが多くなった。時には一度おさめた職業を將來また変更しなければならないことも起るだろう。またそのために住む土地を変えなければならないことも起るだろう。さらにその上に時

代の要求や考え方がすっかり変わって、これに適應しなければならぬこともあるだろう。

このように現代に生きるものはその一生のうちにいろいろの変化を経験しなければならず、それに應じて一度身につけた習慣をすて、新しい習慣を学びとらなければならないことが多くなる。すなわち変化する環境に適應して行動ができる習慣をつけることがたいせつになるのである。環境の変化に應じてものごとを科学的に考えて行動する習慣はそういう習慣の一つということができよう。

3. 環境の変化 I —— 住居の移動

きみたちのうちで、今まで引っ越しをしたことのあるひとは何人いるか。また引っ越しをした人は何回したか。どこからどこへしたか。——このことを詳しく調べてみたまえ。全国的にみるとわが国では15才ごろから25才ごろまでの多くの若い男女青年が農村から都会へ

	少年期 0—14才	生産年齢期 15—59才	老年期 60—	計
全 国 総 人 口	36.6%	56.0%	7.4%	100%
全 国 市 部 人 口	31.6%	63.3%	5.1%	100%
全 国 郡 部 人 口	38.1%	53.7%	8.2%	100%

と移動している。左の統計表をよく見たまえ。これは昭和5年（1930年）の國勢調査から抜粋したものである。市部とは市政の行われているところ。郡部とは町制、村制の行われているところである。もちろん市部にも農村的なところもあるし、郡部という中にも小さいな町がはいっている。しかし大体市部は都市的な地域で、郡部は農村的なところと考えてよい。これを見てもすぐわかるように、少年期には郡部のほうが人口数の率の大きいのに、生産年齢期では都市のほうが人口数の率の大きい。なぜこのように逆になるのだろうか。結局それは郡部から市部へと若い人たちが流れ出て行くからである。

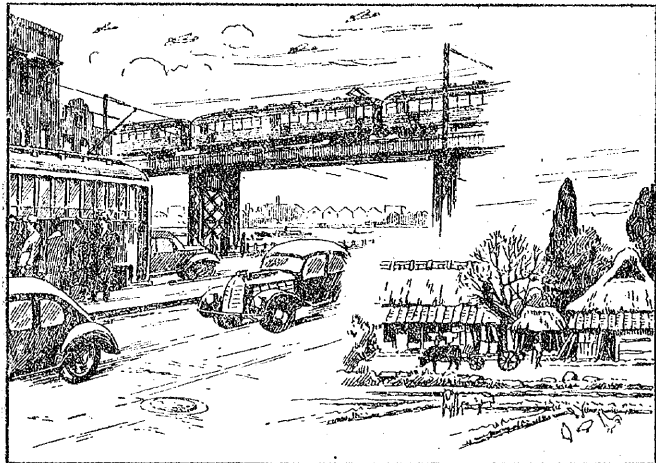
それらの男女青年の大部分は都市に新しい職業を求めて農村から出

て行く。もっと上級の学校にはいるために都会に出て行くものもある。また女子の一部には都市にお嫁に行くものもある。しかしかれらはいずれにしても今まで自分が育った生活環境とひじょうに異った環境で新しく生活をはじめなければならない。農村と都市とではいろいろの点が違っている。衣食住の様式はもちろんのこと、ことばづかいも他人に対する應待のしかたも、ものの考え方も、職業も、娯楽もことごとくに違っている。また生活のテンポも都市は農村よりもずっと落つきがなくめぐるしい。農村の若い青年たちは最初は都会ではどうしても一種のひけ目を感じるに違いない。自分がいなか者と見られはしないかと気がかりになるに違いない。しかし日数がたつにつれて、たいていの青年たちは新しい環境になれ、次第に都市の風習にもなじんで行く。そして最後には、あまり自分を意識しないで行動できるようになる。しかし中にはどうしても新しい環境になじめず、いつまでもひけ目を感じ、そのために都市の人たちからも親しまれず、結局自分で自分をひじょうに苦しい立場に追いこむものもある。そのような青年たちは最後には都市生活そのものに反抗心を持つようになり、ついには反社会的な行爲をするようになるものも出て来るであらう。

その上農村の青年が都市に出て行く時、とくに注意しなければならない一つの事実がある。すなわちそれは、かれらがたいていの場合家族と離れて、他人の中で生活することが多いということである。統計によれば、大都市に住む15才から25才までの男女青年の半数以上は家族から離れて生活しているという。これこそ農村から都市に出て行く青年たちにとっては最も大きい環境の変化である。わけへだてのない家族といっしょに住むのとは違って、いろいろのことに氣を使わなければならない他人にかこまれ、苦しい時にも相談し訴える両親もおらず、うれしいことがあっても共に喜ぶべき兄弟姉妹もいない。

このような環境で柔軟な心を持った青年が生活しなければならない

のである。もし不幸にもかれの周囲に親身になって相談してくれる年長者や、眞実の友情にみちた友人がいなければ、どんなにかれは寂し



生活のテンポ——都市と農村——

く頼りない思いをしなければならないだろう。そしてもし悪い友人たちに誘惑されたり、都市に特有の強い刺激を持つ享樂機関にさそいこまれるようになったら、かれは結局どうなることだろうか。しかも都市ではしばしば人は若いものがなにをしようとする案外無関心である。このような環境の中では青年たちのうちには健全な社会生活に適應できないで横道にはいつてしまうものも出て来るのである。

4. 環境の変化Ⅱ——時代は常に動いている

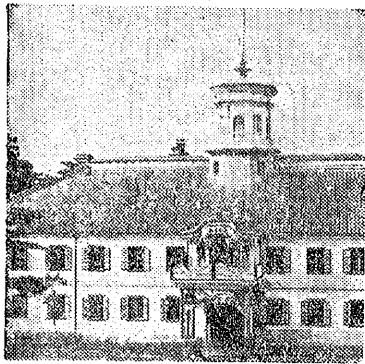
時代が移り、古い制度や、ものの考え方がすたれていつの間にか人を取りまいて環境が一変してしまうことがある。そのような時にいつまでも古い時代に執着して、世の進歩発展に眼を閉じているものは、新しい社会には適應していけない。歴史にはすべてのものが変化する革命的な時期がある。今まであれほど永久不変のもののように思われていた事が数年の間に變化してしまい、たちまちのうちに古

い制度がすてられてしまう。もちろん人々の心のうちに集くっている古い習慣はなかなか洗い落せるものではない。制度が改まっても古いものの考え方は多くの人々の間に依然として残ることが多い。しかし、そのような古い考え方も結局は時の大勢にうち勝つことはできないで、普通はやがて時勢におし流されてしまう。

明治のはじめに森金之丞^{きんぎよう}という先覚者がいた。明治維新によって封建制度は廢止された。長い間の鎖國は打ち破られた。しかし人々の心は昔の古い習慣にまだまだなじんでいた。そのような時に——それは明治4年のことだった——森金之丞は士族も刀をさして歩くのはやめたほうがよいという意見を出した。明治になってもまだ士族は刀をさして歩いていたのである。「第一 官吏、兵隊ノ外、帶刀ヲ廢スルハ随意タルベキコト。第二 官吏ト雖モ脇差^{わきざし}ヲ廢スルハ随意タルベキコト。」というのが森の考えだった。官吏が刀をさして歩いている！今市長さんや、村長さんが刀をさして歩いていたらきみたちはなんと思うだろうか。しかもこのひかえめの意見も、そのころはひどい反対を受けたのである。反対するものは次のようなことを述べた。

「兩刀ヲ帶ルハ皇國尙武ノ性自然ニ發露スル處ニシテ、素^{もと}ヨリ嘉尙^{かしやう}スベキ所ナリ。……荷^いモ大和魂^{やまとたましい}ヲ有スル者、誰カ刀ヲ脱スル者アルベキヤ。」「風俗ヲ變ズルハ容易ナラザルコトニシテ、此ノ兩條ノ如キハ其得^{もく}少クシテ其害多シ。變更スベカラズ。」最初は反対意見のほうが有力だった。しかしかれらは時代がもはや変わったのだということに気がつかなかった。やがてかれらの考えかたは見すてられるようになった。そして7年後の明治9年には森の意見が通り、廢刀令が出たのである。

またきみたちは今では國民全部が普通教育を受けることを当然のことだと考えているだろう。しかし、昔はそうではなかった。封建時代には農民の子どもたちの多くは文字も読めなかった。そしてかれらは



明治初期の小学校(松本開智小学校)

学問などするより家業にはげむように教えられていた。

明治維新になってはじめて子どもたちすべてに対する義務教育の制度がつくられた。(明治5年、1872年)しかしいなかのおじいさんたちの中には、次のような考えを持っているものもいた。「学問ハ何等ノ用ヲナスモノゾ。ワレ生レテ学校ニ入ラズ。四書五経ハカツテ夢ニダモ見ズト雖モ、今年六十未ダ学問ノ有用タルコトヲ知ラズ。只ハヤクニ起キテオソクニ寝ネ家業怠ラズ勤ムルヲ專一トス。然ルニ近頃度々区役所ニ於テ、セガレ等ノ人校ヲ促サル。ワレ再三辞スト雖モ許サレズ。故ニ已ムヲ得ズ、今日無益ト知リナガラ、筆ト硯ト石盤トヲ求メ、殆ンド五十錢ヲ費セリ。タトエ入校スルモ、モシ学問上達セバ立チ所ニ身代ヲ持チ崩シ、一家一族ノ厄害容易ナラズ。」今きみたちの両親のうちで、きみたちを小学校に入れる時にこんな考えを持った人はひとりもいなかっただろう。ところが明治のはじめには、刀をすてることをいやがるものや、小学校を作ることと反対するものが実際にいたのである。かれらは世界の大勢がどうなっているか、時代がどのように変化しているか全然知らなかった。このような意見をかたくに持ち続けているものは、ついには世の中から見はなされてしまうだろう。

わが國は今や明治維新の時と同じような革命的な時期にはいつている。けれども人間の心の中にしみこんでいる古い習慣や考え方は簡単には改まらない。きみたちのまわりに、今でも昭和の帶刀論者や、小学校無用論者はいないだろうか。時代の変化に適應できないで、ただ

古いものを尊いと考えているようなものはいないだろうか。

5. 環境の変化Ⅲ——新しい職業

封建社会と近代社会とはいろいろの点が違っているが、その重要な相違点の一つは封建社会では職業が大体世襲的に受けつがれ、また職業の数も少ないが、近代社会では職業は自由に選択され、その数もひじょうに多くなっていることである。封建時代には、前に引用した福沢諭吉のことばの通りに、武士の子は武士となり、農民の子はいつまでも農民だった。それが大規模な機械工業が盛んになって、ひじょうにこまかい分業が行われるようになると、職業の数もひじょう

に増加し、同時に職業を自由に選ぶことができるようになった。

子どもたちは次第に

アメリカのある大学の学生を調査した結果		
同じ職業である場合の比率		
曾祖	父——祖父	72.0%
祖	父——父	38.9%
父	——本人	10.6%

父の職業をつがなくなってきた。アメリカの学生を調査した報告によると、職業の世襲は時代とともに少なくなっている。

わが國では職業を世襲するのは農業、漁業に一番多く、商工業がこれに次ぎ、官公吏、教員、自由業が一番少ないことになっている。そして職業世襲の傾向は年とともに次第に弱くなっている。

家業を世襲する時代には、家庭がそのまま職業のための準備の場所だった。子どもたちは幼い時から父や母の働きぶりを見て、いつの間にか仕事を覚えて行った。ところが今では多くの青年たちは学校を出てはじめて新しい職業につくようになっている。

かれらは職業について新しく覚えなければならない。この新しい環境になれるまで、かれらはさまざまな困難や苦しみにぶつかることだろう。

その上新しい職業生活にはいるためには、新しい場所に住居を変えなければならないことも多い。このため若い青年たちにとっては、新

しい職業生活は、人生のかどであると同時に一つの危機の時代である。もし新しい環境に満足できないと、かれらは轉々と職業を変えたり、職場を変えたりするようになる。わが國の工場労働者は、一つの工場に長く勤続しないものが多い。あちらこちら職場を変えているのである。これでは氣分的にもなかなか生活は安定しないだろう。

もっとはっきりした危機は全然違った種類の職業に変わる場合である。きみたちは「士族の商法」ということばを聞いたことがあるだろう。明治維新によって失業した武士たちのうちには政府から與えられた公債などを利用して商業や工業などをはじめめるものもあった。しかしかれらはたいてい失敗してしまったのである。この当時のことを大分縣のある士族は次のように書いている。「御維新以來産業ニツカント欲シ、或ハ農トナリ或ハ工商ニ轉ジ以テ生活ノ目的ヲ計ルト雖モ固ヨリ壯年始メテ其業ニ還ルモノナレバ、不練不熟ニシテ一モ失敗ヲ取ラザルナシ。遂ニハ爲メニ從來維持シ來ルノ家産ヲ併セテ之ヲ失フ。爲ス所トシテ皆破産ノ媒介トナルノミ長大嘆息ノ至リニ御座候。」このようにすでに古い職業の習慣を固く身につけているものは、新しい仕事について教育されなければ、決して簡単に新しい職業に変わることはできない。しかも近代社会ではいろいろの事情から、どうしても職業を変えなければならない場合も起りやすいのである。

6. 環境に適應できないとどうなるだろうか——

——不良少年少女たち

きみたちは新聞で浮浪兒の記事を読んだことがあるに違いない。とくに大都會には、いま数千の浮浪兒たちが住んでいる。戦災によって家を失い、両親を失った少年や少女たちである。ある新聞記者は書いている。「かれらのうちには泣くことも忘れたものがある。」と。すなわち、人間の愛情を信用せず、石のように固い心になってしまっているのである。かれらのうちにはきみたちと同じ年頃のものもいるし、

またもっと幼いものもたくさんいる。かれらの前途にどんな運命が待ち受けているか。きみたちは眞剣に考えてみたことがあるだろうか。かれらの多くは不良少年となり不良少女となる。そして反社会的な行爲をするようになる。方引、すり、かっぱらい、さぎ、きょうかつ、暴行、——そのような行爲をかれらは平氣でするようになる。かれらはどうして不良化するようになるのだろうか。



都會の浮浪兒たち

こういう環境に育つ子どもは、反社会的になりやすい。あるものは自分を入れてくれない社会に対して意識的に悪いことをやろうとするだろうし、またあるものは知らず知らず犯罪の習性を持つようになるだろう。貧困もその一つの原因である。ここにある浮浪少年との問答がある。「きみには家があるのか。」「ありません。」「あれば家に帰ればよい

ではないか。」「帰りますけれど帰っても困ります。」「なぜだね。」「しゃがんでいなければならないからです。」よく聞いてみると6畳の部屋に8人ねているのだという。それで夜も足を伸ばして寝ることができずに、しゃがんでやすんでいるのだという。このような環境では浮浪して歩くのも無理はないともいえよう。しかし反対にひじょうに金持の子どもが不良になることもある。父親も母親もいつも外出してばかりいるうちに、そこの中学生が学校にも行かず、金を持ち出して遊んでいたという。愛情と保護と生活の安定がないと、意志の弱い少年少女たちは不良化してしまうのである。同じ理由で、普通あるいは普

通以上の知能の少年少女が不良化しがちなのである。

学生で不良化したものを調べた統計によると、男子では不良の友だちとつきあうことが不良化するのに一番大きな直接の原因となっている。不良少年の多くはなか間がいるものである。最初はひとりで恐ろしくてできなかったことも、なか間からすすめられ、おどかさね、またいくじなしとあざけられたりするとついに不良行為をするようになる。また女子の場合に注意しなければならないのも、少年の場合と同じである。ところで女子はその向上と成長のために適当な機会が與えられていないので、虚栄心を満足させるために不良になるものが相当いるのである。

これらの少年少女たちは結局健全な社会生活に適應できず、不当に輕視されている人たちである。もしきみ自身が誘惑されたら、どんな場合でも斷乎として誘惑をしりぞけなければならない。またもしきみたちの友だちが不良化しようとしていたならば、完全に不良化する前に親身になって忠告してやらなければならない。それと同時に、少年少女たちを取りまく環境を健全なものにすることが、社会のすべての人々の責任であることを忘れてはならない。もしそういうことが行われれば、ほとんどすべての少年少女は正しく生活を営むことができるだろう。

研究すべき事項

1. 下に個人的、社会的、公民的な行動の性質の表がある。もしきみがその中にある性質で自分がすぐれていると思ったら、自分に5点つける。もしある行動の性質で自分がひじょうに劣っていると思ったら、1点つける。もし、普通だと思ったら、自分に3点つける。普通より少し上だと思ったら4点つける。普通より少し下だと思ったら、2点つける。そのように自分で22の性質の各々について等級をつけてみる。最もよい総計点数は110点で、最も低い総計点数は22点になるわけである。自分で点数をきめたあとで、小人数のグループに同じようにして、きみの行動について点数をつけてもらうこと。それから自分でつけた点数と

他の生徒がつけた点数とを比較すること。自分でつけた点数と他の人がつけた点数とを示すような、線グラフをちがった色の線で書いてみること。

性 質	点 数
1. 人づきあいがよいか	_____
2. 明朗であるか	_____
3. 遂行力があるか	_____
4. 独創力があるか	_____
5. 判断力はどうか	_____
6. 忍耐強い	_____
7. のびのびとした氣持でいるか	_____
8. 落着いているか	_____
9. 自信があるか	_____
10. 親切か	_____
11. 他人を尊敬するか	_____
12. 他人と協力するか	_____
13. 集團の幸福を考えるか	_____
14. 指導者としてまた協力者としてうまくやるか	_____
15. 責任感を持っているか	_____
16. 他人に対して寛容か	_____
17. 自分自身しっかりした意見を持っているか	_____
18. 正直か	_____
19. 勤勉か	_____
20. 礼儀正しいか	_____
21. 実情に富んでいるか	_____
22. 余暇をうまく使うことができるか	_____
総 計 点 数	_____

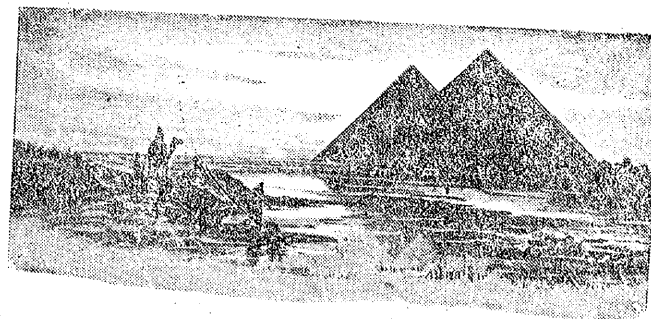
2. 農村は生活環境として、どんな特徴を持っているか。その特徴を10だけあげてみること。
3. 都市は生活環境として、どんな特徴を持っているか。その特徴を10だけあげてみること。
4. きみのうちは、今までに何度引っ越しをしたか。どこからどこへ引っ越しをしたか。なぜ引っ越しをしたか。きみの学級の生徒全体について調べてみたまえ。引っ越しの結果学んだことを表にすること。どんな新しい風習や習慣になれなけ

ればならなかったか。

5. 明治維新の時に、廃刀論者とその反対者がいた。かれらのどちらが、時代によく適応していたと思うか。またなぜか、学級で討議すること。
6. きみたちの父・祖父・曾祖父の職業を調べる。そしてきみ自身が將來選びたいと思う職業と比較してみた。なぜきみの祖先はその職業を選んだか、なぜきみは自分の興味を持っている職業を選ぼうとしているか、について学級に報告すること。きみたちは職業選択について、祖先よりも自由を持っているか。
7. 少年少女たちを不良化させる環境の状態の表をつくる。先生といっしょに学級が、不良化させるようないけない環境の状態をどうしたら変えることができるかということについて討議すること。

第三章 個人はなぜ尊重されなければならないか

1. エジプトのピラミッド



ピラミッド

きみたちはこの絵がなんであるか、知っているだろう。エジプトのピラミッドだ。

全部が石で積みあげられたこの巨大なピラミッドはなんのために作られたのだろう。昔、エジプト人たちは人間は一度死んでも肉体が保存されていれば、再び靈魂が帰って来て生きかえるという信仰を持っていた。このため王者たちが死ぬと、その死体をミイラにしたいせつに保存した。ミイラになった死体はりっぱな墓の中におさめられた。ピラミッドはそのために作られた王様の墓である。

ピラミッドは今でも数十残っている。最も盛んに作られたのは、今から5,000年ほど前エジプトの第4王朝時代だった。中でも有名なのは、カイロから少しはなれた砂漠の中にある三つのピラミッドである。一番大きいのは、クフ王のピラミッドで、底辺が230メートル高さが137メートルある。地上十数メートルの高いところに入口があり、ここから中央の王室に道が通じている。また途中から分かれて

下の王后室にも通じ、さらにその下の地下室にも行かれるようになっている。ギリシアの歴史家の記録によると、クフ王のピラミッドを作るために毎年3箇月間10万人の人間が使役に使われたという。

またある人の計算によると、このピラミッドを作るためには、十数メートル立方の石が230万個必要でそれだけの石があれば、10万人の人間が住める都会が一つできるという。

2. 二つの教訓

きみたちはこの巨大なピラミッドからなにを学ぶことができるだろうか。

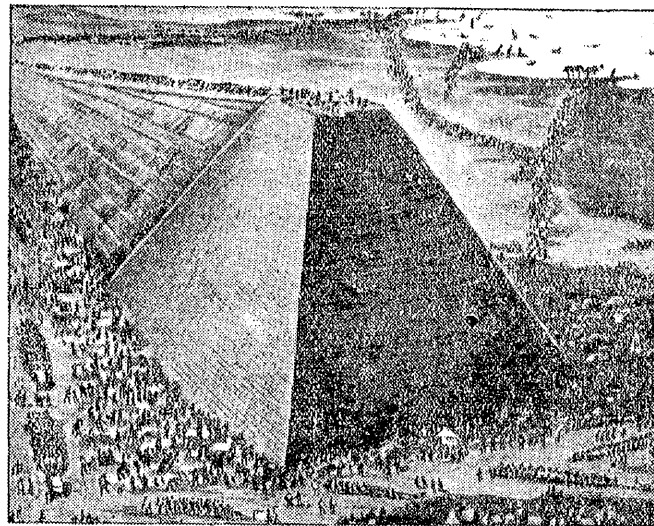
第一には人間が力を合わせて一つの目標に立ち向かうならば、ひじょうに大きな仕事ができるということである。人間以外のものでも、たとえば蟻や蜂などは精巧な巣を共同して作っている。しかしそれは本能の命ずるままに動いて作りあげるのであるから、いつでも大体同じことをくりかえすにすぎない。これに反して人間は理性的にものごとを計画して、その計画にしたがい、各人の分担をきめ、共同して一つの仕事をなしとげることができる。ピラミッドを作ることのできる人間は、同時に大運河を作ったり、——スエズ運河や、パナマ運河のように——大都市を建設したり、飛行機や、自動車や、ラジオを発明したり、また学校をたてたり、議会政治を考え出したりするのである。

人間にはどうしてこのようなことができるのだろうか。それは学んで覚えるという能力が人間に與えられているからである。そのかわり人間は動物のように本能だけをたよりにしては生きては行けない。その意味では、人間は生物のうちで一番手のかかる動物である。人間はほんとうの意味でひとりだちできるようになるためには、生まれてから相当の期間保護されなければならない。複雑な近代社会ではこの期間が少しずつ延びるような傾向がある。この期間は人間にとって一つ

の「修業時代」である。しかしこの「修業時代」に覚えた経験は積み重ねることができる。人間はピラミッドの石を積み重ね、大運河の堤防を築きあげたようにして、経験を積み重ねてきたのである。

しかしきみたちは、あのピラミッドから全然違った第二の教訓を引き出すことができる。

一体ピラミッドはだれのために、そしてなんのために作られたのだろうか。あれだけの大きな仕事を、まだ技術の発達していない数千年昔の人たちが作りあげたのである。どれくらい大きな労力が必要だったろう。何十万人の人々がこの仕事に動員されたのに違いない。しかし一体かれらは自分自身のために働いたのだろうか。そうではなかつ



ピラミッドはどうしてつくられたか

た。かれらのあるものは奴隷だった。かれらは看視を受けながら働かなければならなかった。そしてピラミッドはかれらにとってなんの役にも立たなかった。それはごく少数の王者たちを満足させたものにす

ぎなかった。考えてみたまえ、焼けつくような太陽のもとでエジプトの砂漠に蟻のようにまっ黒になって働く何十万人の人たちを。かれらは大きな仕事をなしとげた。しかしそれはかれら自身の生活を豊かにするものではなかった。それどころではない。かれらの中には、この仕事のために病氣になったり、けがをしたりしたものもきつと多かったに違いない。かれらの汗はただむだに流されたのである。

人間はすばらしい能力を持っている。お互の経験を交換し、共同して大きな仕事をなしとげることができる。しかしこのような能力を持っているからといって、その能力がいつでも人間全体の生活の向上のために利用されるとは限らない。時には、ごく少数のものの満足や虚栄心のために、間違っ利用されることもある。これがピラミッドからきみたちが学ぶ第二の教訓である。

3. 人間にはがまんのできることとできないことがある

今もしどこかの支配者が自分のためにピラミッドを作ろうとしたらどうだろうか。国民全体がこぞってこれに反対し、このばかげた人間を、支配者の地位から追い出すだろう。そのような事業はひとりひとりの国民の幸福のためには必要がないからである。エジプトの専制政治も決して永久に続いたわけではなかったのである。

きみたちは人間が環境に適應して生活していること、また環境に適應しなければならぬこと、また環境が違えば、違った人間性が發達するということを学んだ。実際人間ほどいろいろの環境に適應できる動物はいない。熱帯植物は少し涼しい温帯に持って行けば枯れるだろう。北極に住む白熊を熱帯につれて行けば、特別に暑さを防ぐ部屋を作ってやらない限り、やがて死んでしまうだろう。しかし人間は人間の作り出した文化のおかげで、寒いところにも、暑いところにも生活できる。また社会的、文化的條件がかなり違っていても、生きて行く力があるのである。しかしその力にも限度がある。きみたちの両

親は長い間、壁の上に正座できるだろう。しかしきみたちはたいてい長い時間正座できないだろう。まして欧米人たちは、ほんのわずかの時間でも正座できないだろう。これはすべての習慣のためである。壁の生活をしている日本人は正座できるし、いすの生活をしている欧米人はいすに腰かけるほうが楽だと感じている。人間のからだはどちらにでも練習すればある程度なれるようになる。

しかし人間には練習してもできないことがある。たとえば、どうしても消化できないものをたべたり、換気が全然できない部屋で生活したりすることである。それと同じように人格や自由を認められない生活もいつまでもがまんすることはできない。このように人間にはがまんできることと、できないことがある。それは、人間にはさまざまな基本的な要求があるからである。

4. 人間は基本的な要求がみたされなければ人間らしく生きて行けない

人間はさまざまな根本的な要求を持っている。

第一には人間は生きて行く以上肉体的な要求を満足させなければならない。食物の要求がそのうちでも一番重要なものである。きみたちは、人間が一日最小限度何カロリーの食物と、どれだけの分量のビタミンをとらなければ健康を保つことができないかをすでに学んだに違いない。食物が不足すれば時には恐ろしい犯罪を犯すようなものも出てくる。

わが國でも第一次世界大戦のあとで、米の値段がひどく高くなり、あちらこちらで、いわゆる米騒動といわれる小さな暴動が起ったこともあった。また敗戦後わが國民の多くがどんなに食糧のことで苦労しているかは、きみたち自身によりもよく知っているに違いない。食物が十分でないために多くの人たちが暗い氣持で毎日をすごし、むだな時間を浪費し、産業の復興も遅れている。このことだけでも、人間

は食物の苦勞から解放されなければ決して人間らしい生活はできないし、また社会全体も安定しないことがわかるだろう。しかし肉体的な健康を保つためには食物だけでは十分ではない。このほかに着るものや住居に対する要求もひじょうにたいせつなものである。

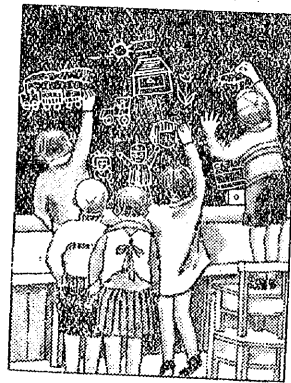
しかし人間の基本的な要求は決して肉体的のものばかりではない。人はパンだけで生きていけるものではない。人間はさまざまな社会的、文化的要求も持っている。あらゆる人間の集團生活は、ある程度までこれらの要求を満足させるものである。もちろんそれはいつでも十分な満足を与えていたわけではない。しかし人間の社会的、文化的要求を全く無視した集團生活というものは今までに存在しなかった。たとえ存在したとしても、それは決して長続きしないにきまっているのである。

人間の社会的、文化的な要求にはどんなものがあるだろうか。第一には人間には愛情を求めようとする要求がある。また人間には自分の考えていること、いいたいことをなにかの形で表現したいという要求がある。また人間には珍しいものを聞いたり、見たり、しらべたりしたいという要求がある。また人はだれでも他人からある程度認められ、尊重されたいという要求がある。あるいは人間には生きているという喜びを深く強く味わいたいという要求もある。その他まだいろいろの要求や欲望があるけれども、おもなものは以上のようなものである。

愛情への要求はひじょうに強いものである。長い間たったひとりで生活しなければならないようなことになったとしよう。必ず人間を恋しく思う気持ちが抑えつけることができないほど強くわき起ってくるに違いない。独房に長くかん禁されている囚人などは、そのために病氣になったり神経衰弱になったりする。また逆にきみたちはある時にはたったひとりぼっちになりたいと思うこともあるだろう。これも愛情への要求の違った表現なのである。すなわち自分をほんとうに愛して

おらず、自分をほんとうに理解していない人たちにかこまれているのが苦痛になって、いわば自分で自分に甘えるような気持ちになって孤独を求めるのである。未開社会では、家長を中心に、二世代、三世代の血族やあるいは親類などがいっしょに生活している大きな家族がある。そのような大家族も実際にはその中に夫婦中心の小家族があって、それがいくつか集まって大家族を作っているのである。このような家族の組織では、時にはある一つの夫婦が家長やあるいは他の家族たちから、ひどくいじめられることがある。最初のうちはいじめられている夫婦も自分を抑えてがまんしているだろう。しかしある限度をこえろと、がまんできなくなって、どこかへ逃げてしまうことがあるという。逃げて行けば経済的な生活では必ず困るに違いない。そのことを知っ

ていながら逃げるのは、夫婦中心の愛情の生活を最後まで守ろうとするからである。愛情への要求が経済的な要求よりも強くなるのである。自分の考えていることを発表したり、表現したりしたいという要求も強いものである。四つ五つの子どもの鉛筆と紙を與えてみたまえ、いつまでもいろいろな絵をかくて、ひとりで喜んでいることだろう。この夢中になって絵をかいている子どもの内心の要求は、天才的な画



小さい藝術家たち

家たちの表現への衝動と全く同じものである。また自分のいいたいことをいおうとする要求もこれと同じである。この要求が言論の自由の権利の基礎となるものである。もちろん少数の支配者たちになるべく自分たちに都合の悪いことをいわせまいとじて努力したこともあった。しかし言論の自由はどんなに圧迫しても完全に抑えつけられるものではない。たとえば江戸時代のこ

とを考えてみたまえ、言論の自由はひどく圧迫されたけれども人々はお上の眼のとどかないところで、ないしょで政治の批判をしたり、お上の悪口をいったり、生活の不平をいったりしていた。そしてたくさんのお上の諷刺的な狂歌が作られ、街のあちこちの壁には落書が多く書かれたのである。

子どもは珍しい花や虫や、その他なんでも眼新しいものを見つけると、きつと「これはなに」と聞くものである。そして一つのことがわかると、さらに進んでもう一つ先のことを調べようとする。おとなでも街で人が集まったりしていると、なにが起ったのだろうかと立ちどまって、背のびをして中のぞきこもうとする。これはみな人



電光ニュース

間に新しいものを見たり聞いたりしようとする要求があるからである。この要求をみたすために、いろいろなことが、くふうされている。学校もそのひとつである。そのほか、書物や、新聞や、ラジオや、ニュース映画や博物館などもそうである。この要求を人間が持っているおかげで、人間はさまざまなことを発見したり発明したりした。

コロンブスが大西洋を渡って西へ西へと航海していった時、かれの胸の中には新航路を発見したいという願望が、高まうて行く波頭のよう

にわきあがっていたことだろう。
また人間には人から尊敬され、認められたいという願望がある。人間は全く代償なしで長く働くことはできない。完全に犠牲的な行為というものは長続きしないものである。もちろん人が見ているからよいことをするというだけではあまりよいことではない。しかしどんなことをやっても、いつでも人に認められないならば、どんな偉い人でも、

しまいには必ずいやになるだろう。世の中の人が無理解でわかってくれない場合でも、たいていの人、友人でも、妻でも、だれでもよい。ただひとりでも自分を理解してくれる人があればよいと思う。そのような人もない時には、神だけは見ていてくださると信ずる。あるいは神を信じない人でも、自分だけは知っていると考えて、自分で自分をなくさめる。なくさめる人、なくさめられる人とは、同じ自分の中に住んでいるふたりの人間なのである。人間はこのような要求を持っているおかげですぐれた仕事を残したのである。もし人間が、恥を知り名誉を重んずる気持も、人から尊敬されたいという気持も全然持っていなかったならば、人間の社会は決して進歩も発展もしなかっただろう。

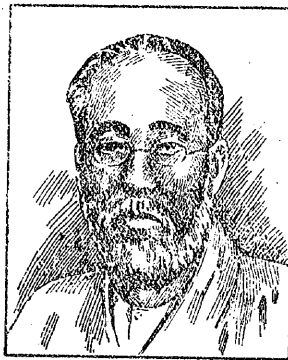
5. 基本的人権はこのような要求にもとづいている

すべての人間は以上のような根本的な要求を持っている。そしてこのような要求を持っていることを人間の権利として認めることが、基本的人権を認めるということなのである。今までの人間の長い歴史では、このことは決していつでも十分に認められてはいなかった。たとえば封建時代には、農民たちが学問をすることは喜ばれなかった。それは学問をするひまがあったら家業に精出してくれた方が、封建領主たちは、都合がよかったからである。このようにして封建時代には、進歩したことがらを知らうとする人間のたいせつな要求は、強く抑えつけられていた。

しかし人間の基本的な要求は抑えつけるにはあまりに強いものである。やがて多くの人々があらゆる人間は人間である以上平等の権利を持っているということに気がついた。このことはとくに18世紀後半の、アメリカの独立宣言(1776年)と、フランス大革命における人権宣言(1789年)とに、はっきり示された。人間の根本的な要求が当然人間に許されなければならない権利と考えられるようになって

た。これが人類の基本的人権といわれるものである。生命の安全を守る権利、働く者が人間らしい生活をする権利、言論や出版や集会の自由の権利、健全な家庭を作る権利、職業を自由に選ぶ権利、移轉の自由の権利、教育を受ける権利、宗教を信仰する自由の権利、これらが基本的人権の数例である。

このような権利はすべて人間の根本的な要求に根ざしている。それ



中江兆民（日本の人権啓蒙の先覚者）

故基本的人権を尊重する社会は最も永続性があり、また最も安定的である。なぜならそのような社会では、個人はその根本的な要求をその社会生活のうちで十分に満たすことができるからである。またそれ故すべての個人がそのような社会を支持するようにならないからである。基本的人権をたいせつにすることは、社会にとっても個人にとってもともにたいせつなことなのである。

6. 社会はだれのための社会なのだろうか

きみたちのうちには社会にはめんどろな規則や習慣があり、もしそれに反したことをすれば罰せられるし、なんだか人を抑えつけるような、あまりありがたくないものだと考えているものもあるだろう。実際、社会生活には、学校でも、役所でも、商店でも、映画館でも、あるいは道を歩くにも電車に乗るにもすべて、してよいこと、したほうがよいこと、しなければならないこと、しないほうがよいこと、絶対にしてはいけないことなど、数限りない規則ができています。これだけ考えると社会生活はいかにもめんどろくさい規則のかたまりのように見える。しかし一体社会はだれのためにあるのだろうか。また、だれ

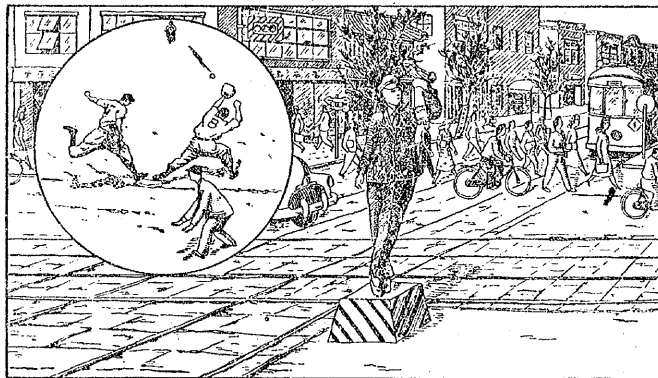
のためにあるようにならないものだろうか。

集団生活は実際には規則のために存在しているのではない。集団を作っているひとりひとりの要求に應ずるために存在しているのである。この意味で集団生活の規則は、たとえていえば、スポーツの規則に似ている。

きみたちは野球やバレー＝ボールをして遊んでいる。さて野球にも、バレー＝ボールにもみなきちんとした規則がある。しかし規則を守るのはなんのためだろうか、それはきみたち全部が愉快に野球などを楽しむためである。だから自分に都合がよいからといって、規則に反したことをしてはならない。そんなことをかってにしては、みな楽しく野球をすることができなくなるからである。またひとが気がつかないからといって、こっそりするいことをするのもいけない。なぜなら、こんなことをこっそりする人間は、いつかは公然と規則に反することを平気できるようになるかも知れないから。また他人の信頼をうらぎることは、どのような集団生活でもよくないことであるから。それ故スポーツにはなによりもフェア＝プレーがたいせつなのである。しかしだからといって、野球を楽しむことより規則のほうがたいせつだと考えるのも間違っている。たとえば野球をやる全部の人に都合の悪い規則を作りだして、これを守るように命令することは間違っている。なぜなら野球のための規則であって、規則のための野球ではないからである。

集団の規則もこのようなものでなければならない。国の法律も同じである。国民はもちろん法律を守らなければならない。もし国民が法律を無視した行為をして平気であるようになれば、国民全体の生活が不安になるにきまっている。しかし国民生活の内容が変われば、それを統制する法律も変わらなければならない。きみたちは18人で野球をやるだろう。しかしもしそのうち5～6人が途中でやめてうちに帰

ったとしよう。あとに残ったものだけで、もし野球を続けてやるつもりならば、みなで相談して少しその規則を変えなければなるまい。しかしもしもっと人数が少なくなれば野球はできなくなるだろう。その時にはまたみなで相談して、たとえば野球をやめて、バスケット=ボールをはじめたりするのである。國民生活もこれと同じである。國民生活の内容や条件が変われば、みなで相談して少しずつ規則を変えなければならない。これが廣い意味での改良である。しかしその条件や内容が急激に変化すれば改良では間に合わなくなる。その時には野球をやめてバスケット=ボールをはじめることになる。これがいわゆる革命である。遊んでいる人たちは同じ人たちであっても、ただ遊びかたが変わっただけなのである。改良も革命も、ともに集團の人たちが愉快に遊ぶことができるための必要な手段である。



集團生活の規則

今までわが國ではこれと反対の間違った考えかたがあった。國は國民のためにあるのではなくて、國民が國のためにあるものと考えられていた。そして國民に、集團の幸福のための必要以上に犠牲が強制されていた。しかし一体大多数の國民のためにもならず、また國民の子孫のためにもならず、しかも國のためになるというような規則が

あるだろうか。独裁的な権力を持つものはすぐに「集團のために」といいが、しかし家庭の父や母や子をのぞいてどこに家族があるだろうか。先生と生徒とをのぞいてどこに学校があるだろうか。もちろん、人類のため、國のため、社会のために自分の利害をすてて行動しなければならないこともある。しかしその犠牲的行爲がこの上なく貴いのは、それが人類のひとりひとりのために、國民のひとりひとりのためになる行爲であるからである。

社会生活は人間の基本的要求をみたすために存在している。ひとりひとりが自分の人間性を美しく完全に発達させることこそが、人間の生きる目的であり、生きる喜びである。個人を尊重し、尊敬してこそ、健全で安全な社会生活が可能である。どんなに小さな子どもであってもその生命はなによりもたいせつにしなければならない。新しい社会は自由な個人が集まって共通の目的を追求するところに作られる。各個人の声や投票の力が集團生活のための規則を作っていくのである。

7. 人間の行動にはいろいろの型がある

社会を作っているのはきみたちである。きみたちの一つ一つの行爲によって、社会はよくなるれば、悪くなる。進歩発展すれば、退歩もする。すべては人間の力によって動いて行く。その人間の行動には普通三つの型があるといわれる。

第一の型は、今までの習慣にしがみついている、なにからなにまで今までのしきたり通りにする行動である。年をとって今までの習慣を変えることがめんどくさくなり、また自分のやることはなんでも正しいと考えているかたくなな人たちの行動、あるいは科学的な批判力を持たないために、どんな迷信でも一度信じこんだらなかなか眼のさめない人たち、自分のやっていることにどんな意味があるか知らず、ただ先祖のやったことをくりかえしている未開人たち——そのような人たちの行動がこの第一の型のなか間である。

第二の型は、古い制度や習慣に反抗して、いつも不平ばかりいつているけれども、しかし新しいものを作ろうとするのではなく、たとえ新しい制度や習慣ができて、また、すぐ不平をいうような人たちの行動である。破壊のときには役に立つけれども、建設の時には無力な行動。歩ばかり追って現実の生活に足のついていない行動、一定の職業をじみちにやって行くことができなくて、あちらこちらとさまよい歩く人たちの行動などがそのなか間である。



明治初期の風俗（新田源一の時代世田をあらわしている）

第三には、改める必要のないすぐれた伝統は心からこれを尊重するが、改めなければならない習慣や制度に対しては、どんな障害があっても改めようとする行動がある。この第三番目の型の行動こそ規則を守ると同時に規則を新しくして行く行動である。環境に対して不平をいわずにいろいろな問題を合理的に解決しようとする行動である。そういう行動こそ社会を進歩させて行く原動力である。

どの型の行動がたいせつであるか、いうまでもあるまい。きみたちのまわりにもきみたちの決心一つで解決できる問題がいくらかもある。

家庭の中で、学校の中で、隣り近所の中で、少年少女たちの集まりの中で、ひとりの人間の創意と実行力とを待っている問題がいくらかもある。多くの人は「自分ひとりだけでやってみてもなんにもなるまい。だからひとりでやるのはやめよう」と考える。しかしやろうと思えば自分ひとりでもできるではないか。それなのに、なぜきみはしりごみするのか。ほんとうの勇気のある行動とはどういうものか、きみたちはよく知っているだろう。

研究すべき事項

1. 身体のために願いの、習慣的になってなかなか改めることのできない生活様式がある。衣食住について、それぞれ例を三つずつあげる。それを持ちよって、どうしたらそれを改めることができるかについて、学級で討議すること。
2. もしきみたちがさらに高等教育を受けたいのに、家庭の事情がそれを許さない時には、きみたちはどうするか。学級で討議すること。
3. 昔は、言論の自由が圧迫されることが多かった。なぜだろうか。それについて文章を書いてそれを学級で読むこと。
4. きみたちの学校で改めたほうがよいと思うことを考えてみたまえ。またなぜ改めたほうがよいかわかり理由を明らかにして、自分たちでできる範囲でその改善を行うこと。
5. きみたちの社会で基本的人権はどんな場合に圧迫されたか。基本的人権と考えられるものはどんなものか。基本的人権を認めることと、社会の義務を忠実に守ることとは両立するか。学級で話し合った上で、権利と義務とがよくつり合うような状態を絵に現わしてみること。
6. 明治維新によって、どんな基本的人権が認められただろうか。しかしどんな点でそれが十分でなかったかを調べる。現在はどうだろうか。個人の人権を否定するような行為について調べ、その改善について討議すること。
7. 國語にはなぜたくさん敬語があるのか。それは差別待遇をどんなふうに反映しているだろうか。敬語を使うことは、人々のいろいろの集團の平等や男女平等の原則と一致するだろうか。

第四章 きみたちはどのようにして共同生活 のために活動することができるか

1. きみたちの前途には無限の活動の領域が横たわっている

きみたちは、なんのためにこの世に生まれてきたのだろうか。

きみたちはこの地上に生をうけた以上は、だれしも生き甲斐のある一生を送りたいと願っているに違いない。また、だれしも明るく、健康で、幸福な生活を望んでいるに違いない。しかし、そのような生活はきみひとりの力で得られるだろうか。

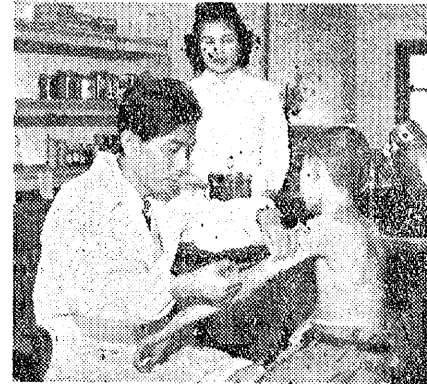
未開人たちがどんなにみじめな生活をしていたか想像してみたまえ。かれらは自然の恐ろしい威力の前ではほとんど無力だった。豪雨、日照り、暴風、地震、はげしい寒さと暑さ、そのような天災や地変にいつもおびやかされていた。また、山脈や川や海に妨げられて交通がで

きないために、お互いに作ったものを交換したり、いろいろの技術を教え合うこともできなかった。野獣の襲撃に恐れおののかなければならぬこともあったろう。また伝染病にかかったり、けがなどして

も、これをなおす方法も知らなかったろう。そんな時には実際にはなんのききめもないまじないのようなもので、気休めするよりほかなかったに違いない。また農業や漁業の技術が発達していなかったで、食糧も不足がちだった。そのために老人や子どもたちが殺されたこと



自然との戦い I (凶獣と戦う古代の人々)



自然との戦い II (現代の医療)

わが國にも昔の傳説には年をとった親をすてる「うばすて山」の語がある。

なんという無力な人間たちだったろう。それにくらべて現在の文明化された社会に住む人々の生活を見たまえ。もちろんわれわれの生活はまだ不完全なものである。しかし野獣に襲われる心配などは全然なくなったではないか。われわれの住む家は寒さや暑さを防いでくれる。またわれわれは老人や子どもを殺すほどに食糧に苦しんでもいない。病気を適切に防ぐ方法も知っている。このような一つ一つが、われわれの生活を次第によくし、豊かにしている。しかしそれはだれのおかげだろうか。それはもちろんきみひとりの力でできたことではない。人類全体の共同努力の結晶である。とくに多くのすぐれた科学者や発明家や探險家たちのおかげである。

しかしわれわれの生活には、まだ不合理なことや研究すべきことや、改めなければならないことがいくらかでもある。そのため多くの人たちが苦しんでいる。きみたちの中には自分だけが幸福であれば、人のことなどはどうでもよいと考えているものがあるだろうか。しかし人間は決して自分ひとりだけで幸福になれるものではない。きみだけが健

さもある。北米の北極海沿岸に住むエスキモーたちは、自分で自分の食物をさがせない老人や、キャンプの移動の時に付いて行けない老人たちを殺すという。

康であっても、きみの両親が病氣にかかれば、きみは決して幸福ではあるまい。また近所でだれかが傳染病にかかっていれば、どうしてきみは健康を確保することができるだろうか。ことに良心のするどい人間ならば、他人が不幸でいる時に、自分ひとりが幸福であることは不可能なのである。

きみたちは世の中の人たちのために働かなければならない。それは世の人々の生活とともに、きみ自身の生活をも、いっそう人間らしく、いっそう幸福にするためである。大きく分けて世の中の人のためになる仕事に二つの方面がある。第一には、自然から人間を守るために自然と戦い、ますますうまく自然に適應する方法を見つけたことである。

第二には人間と人間との間の関係をますます調和的にするための方法を考え出し、そのために働くことである。しかしどちらにしてもきみたちの前途には限りない活動の分野が横たわっている。

2. 人間は長い間自然と戦って来ている——發明と発見の歴史

われわれの生活が明るく豊かになるには、われわれの物質的生活が向上することがどうしても必要である。今までわが國には物質的生活のことをいうことはいやしいことであるように考えている人がいた。しかしすべての人が人間らしい精神的な生活ができるためには、人類全体の物質的生活の向上が土台にならなければならないのである。われわれの物質的生活はいつでも自然との交渉、自然との戦いを通じて高められて来ている。人間は生きて行くためにはいつでも自然を相手にし、自然のうちから生きるためのかてを獲得しなければならなかった。そして、人間もまた自然の子なのだから、ある程度までいつでも自然の法則にしたがって生活していた。しかし最初、それは無意識的だった。こちらから進んで自然の法則を発見し、これを利用しようとする努力が生まれるまでには長い年月が必要だった。

未開人たちは、われわれの科学にあたるものとしてまじないを持っている。かれらは、たとえば雨がほしい時にはおいのりをしたり、雨が降るまねをしたりする。かれらはこのような方法で確かに雨が降ると信じている。しかしそれは客観的科学的には全く根拠のないことである。文明人でもさまざまな偏見にとらわれている人たちが多く、歴史的には占星術や錬金術はつい 3—4 世紀前までまじめに信じられていた。しかし次第に偏見にとらわれなくて、事物をありのままとらえようとする精神が強くなって来た。

コペルニクスやガリレオの出たいわゆるルネッサンス時代のころから先入見にとらわれなくて、自然の法則を追求しようとする精神が強くなって来た。

現在われわれが使っている發明の基礎的なものはほとんど全部ルネッサンス時代以後のものである。しかし先入見は、中世でおしまいになったわけではない。發明、発見の多くは、最初は世の中の人たちからあざけられたり、理解されなかったり、恐れられたりしたことが多かったのである。しかし勇氣と知性によって、多くの人たちが人類のために貴重な發明発見を残してくれた。一つ二つ思い出してみよう。

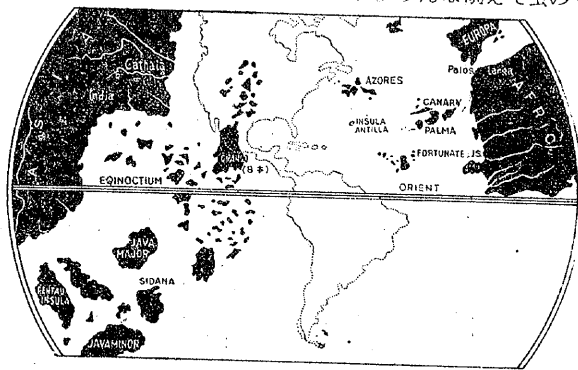
たとえばジェンナーが種痘法を完成したのは 1798 年、今からたった 150 年程前のことだった。それ以前には天然痘に対する防禦法はなかった。女の子などは天然痘が重いか軽いかによって器量がきまるとされていたものだった。しかしジェンナーが天然痘にかかった牛から免疫性の血清ぶんけいを取ることに成功した時には、だれもこれを信用するものがなかった。むしろ種痘をひ



ジェンナーとその子ども

どく恐れただものである。そのためにジェンナーは自分の子どもを最初の実験に使ったのである。

きみたちは、ポルトガル人マゼランの話を知っているだろうか。かれはこしょうなどの薬味の出る島を求めて——当時ヨーロッパはこのような薬味が非常にたいせつにされていた——5隻の船を指揮して出発した。1519年のことだった。大西洋を横ぎり、南アメリカの南端附近をまわる時には、暴風とふぶきとになやまされ、乗組員はマゼランに反抗して暴動を起した。しかしマゼランは部下をうまく統制して航海を続けた。やがて海峡をまわり（この海峡はのちにマゼラン海峡となづけられたものである）新しい大洋に出た。波は静かだった。この大洋はのち太平洋とよばれている。それから西へ西へと進んだけれども98日間、陸を見ることはできなかった。みんな飢えて虫のくった



ベハイムの世界地図
1490年ごろ地球の形がもとづいてつくられたもの。アメリカ大陸はこの地図にはない。
当時ではアメリカ大陸の存在が知られていなかった。日本はシパンゴとなっていた。

ビスケットや、ねずみをたべた。しまいには帆につけてある皮を何日も海水にひたして、やわらかくしてしゃぶった。不幸にもマゼランはフィリピンで土人のために殺された。しかし残った部下はお互にはげましあって、さらに航海を続け、出発してから3年めにイスパニアに帰ることができた。しかし帰りついた船はたった1隻だった。この

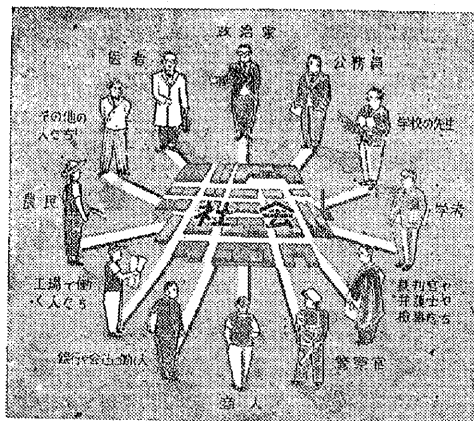
ような苦しみをこえて人類最初の世界一周の航海は成功したのである。

人間がどのようにして、自然と戦ったか。このような勇ましい話はあげれば数限りないほどある。このような人たちのおかげで、われわれの現在の生活が作りあげられたのである。

3. 人と人との関係は調和的にならなければならない

以上はおもに人間と自然との関係の面である。しかし人間生活にとってもう一つたいせつなのは、人間と人間との関係の面である。人間と人間との関係——たとえばきみたちは両親や兄弟となかよく暮らしているか。きみたちの学校では、先生と生徒がうまく協力しているか。市長さんと市民、村長さんと村民との間によく意志が通じ合っているかどうか。資本家と労働者との関係は、組合員と組合指導者との関係は、生産者と小売商人と消費者との関係は、政党と政敵との関係は、最後に國と國との関係は——このようなすべての関係はうまく行っているだろうか。それらはほんとうに民主的に行われているだろうか。人間の生活にとっては、このような人間関係がうまく調和的になっていることがひじょうにたいせつなのである。いくら人間がうまく自然の力を利用して、それだけではわれわれの生活は決して幸福にはならない。生活にどうしても必要な品物を大量に生産する技術が発明されたとしよう。しかし、もしその技術を資本家の一部が独占して、できた品物を高い値段で國民に売りつければ、その技術はおもに一部の資本家の利益になるだけである。あるいは、物理学や化学の知識がいくら発達しても、それが戦争の技術にだけ利用されるならば、人類はいつまでも恐怖からのかれることはできないだろう。

人間どうしの不和や、いざこざや圧制をとりのぞくために、多くの人たちが並々ならぬ努力をはらっている。政治家、官吏、学校の先生たち、政治学や経済学や社会学や心理学や、その他いろいろの学問を研究する人たち、裁判官や弁護士や検事たち、警察官、町や村の商人、



社会をささえる人々たち

銀行や会社に働く人たち、市役所や町村役場に働く人たち、労働組合のために働いている人たち、幼稚園や託児所や孤児院や養老院や公共職業安定所や教育相談所や結婚相談所につとめている人たち、図書館や博物館や新聞社や本の出版所や印刷所に働く人たち、それから美と真実と信頼の世界をわれわれに教える藝術家たち……もちろん以上のような仕事をしている人々の中には、自分の仕事の本当の意味をよく自覚していない人もいることだろう。しかし結局このような人々のおかげで人間と人間との関係が次第に合理的になり信頼と愛情と相互扶助の精神が強まりつつあるのである。

4. 不和の原因を除くためには——愛する努力が必要である——

しかし愛情は万能ではない

人間と人間との関係はなかなかうまく行かないことがある。それには三つの場合が考えられる。第一にはお互いどうしの愛情がなくなってしまう場合、第二には利益や権益や、さらに生存や言論の権利の分配が不公平である場合、第三にはお互いの立場について理解がない場合である。

家族生活がうまく行かないほど、人間にとって苦痛で寂しいことはない。家庭といえだれでもあたたかい愛情にみちた雰囲気を感じて

銀行や会社に働く人たち、市役所や町村役場に働く人たち、労働組合のために働いている人たち、幼稚園や託児所や孤児院や養老院や公共職業安定所や教育相談所や結婚相談所につとめている人たち、図書館や博物

べる。しかし、案外ごたごたしている家庭が少なくないのである。中にはごくつまらないことで、しょっちゅう口げんかをしたり、いざこざを引き起したりしている家庭もある。きみたちは、だれでも一度や二度はうちでぶんぶん怒った顔をしてみんなにあたりちらしたことがあるだろう。しかしなにが原因だったのだろうか。今考えてみればおかしいくらいばかばかしいことだったに違いない。しかしこんな小さいいざこざも一度や二度はわがままといってすまされるけれども、それが毎日続くようでは、いつか家庭の中のあたたかさがなくなってしまふ。きみたちは悲しいから泣くのではなくて、泣くから悲しいのだという有名な心理学の学説を知っているだろうか。愛情も同様である。人は愛情を持っているから、人にやさしくするだけではない。まず人にほんとうにやさしくしてみたまえ。すると自然に愛情がわきあがって来る。愛情は決して受動的なものではなくて能動的なものである。人にやさしくされるのを待っていてはならない。場合によってはきらいな人に対してもまずやさしくしてみたまえ。するとやがてその人がすきになるものである。少なくともそのきらいなところに対して寛大な気持ちになり、もっとよくその人を理解するようになるだろう。

愛情はひとつの努力である。もちろん家庭の中のいざこざも、家族制度の欠陥のために起ってることがある。たとえば諸外国にくらべてわが国では離婚するものがひじょうに多い。(アメリカは例外的に離婚の多い国であるが) その原因にはいろいろのものがあるが、一つはわが国では、結婚した夫妻が夫の両親と同居することが比較的多いため、いわゆる、しゅうと、しゅうとめと嫁との関係がうまく行かなくなり、そのため離婚しなければならなくなるものができて来るのである。この場合には、いわゆるしゅうと、しゅうとめも新しくその家にはいつて来る嫁も、お互に寛大な気持ちで許し合い、愛し合おうとする心構えを持つように努力しなければならない。けれども同時に家長

に強い権力が與えられているような現在の家族制度についても深い反省が必要となっている。

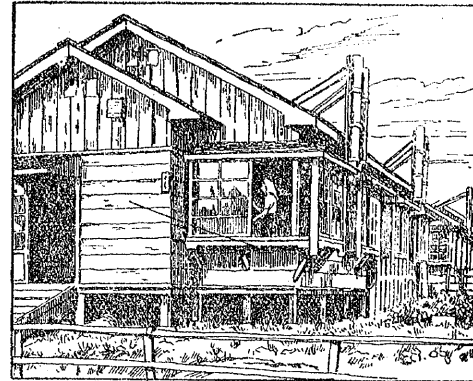
家庭のような小さな集團は、愛情だけでうまくまとまりやすい。しかし近代的な社会生活では人間関係はずっと複雑になっている。人々はいろいろな集團の中で活動し、またひじょうに多くの人たちと接触するようになっていく。このような社会生活では、人と人とが調和的に生活するためには、愛情だけでは決して十分ではない。たとえば資本家と労働者の関係や、政党と政党との関係を愛情だけで調和しようとするのは誤っている。複雑な人間関係では、すべての人の権利の尊重とともに、人間の理性的な判断がとくに必要になる。

5. 不和の原因を除くためには——Ⅱ利益の分配を公平にしなければならない

産業革命以後資本主義が発展し、大規模な機械工業によって大量の商品が作られ、われわれの日常生活はひじょうに豊かなものになった。しかし反面、資本家と労働者との対立がはげしくなると、そのため社会生活のバランスがとれず失われがちになった。もし資本家が自分の利益ばかりを考え、労働者を安い賃銀で長時間働かせようとするれば、資本家と労働者の利害は対立するよりほかはない。そして労働者がこれに反抗して、仕事をなまけたり、ストライキばかりやっていると、おしまいには社会全体の動きがとれなくなるのである。

実際わが國では今まで労働者階級の地位はひじょうに低かった。そして労働の条件もひじょうに悪かった。明治30年頃には紡績の女工たちは14時間以上働いていたという。その当時、足利、桐生地方の3万近くの女工員を調べた報告によると「その労働時間は………先ず朝未明より夜の十時までは通例なるが如し。家によりてはあるいは十一時まで夜業せしむるところあり。」とある。このような長時間労働は決して明治のころだけのことでなくて、つい最近まで多かれ少

なかれ続いていたのである。



新しい労働者住宅 一北海道炭坑一

の医者の郷里のある部落は肺結核の患者でいっぱいになったことがあるという。それは女工員として出稼ぎに出た少女たちが胸を悪くして帰郷し、それがたちまちのうちに村の人たちに傳染したからである。

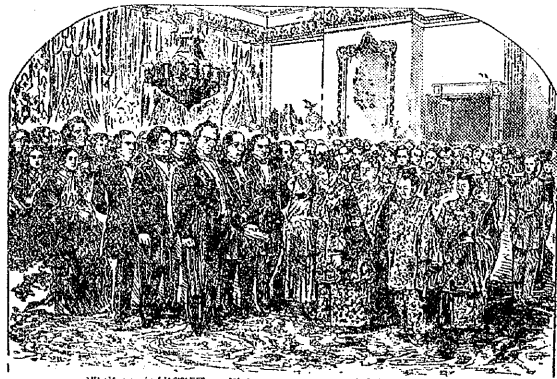
もし資本家たちがこのように悲惨な労働者の状態に対して、自分の利益だけを考え、自分だけがぜいたくな生活をしているとすれば、だれが考えてみても利益が公平に分配されているとはいえないだろう。このような状態が続けば、おそらく労働者と雇よう者の間には争いが絶えないだろう。それでわが國でも最近では労働者の利益をたいせつに考えるようになって来た。労働基準法や労働組合法については、きみたちはすでに學んだことだろう。このような法律の目的は、結局労働者にも人間らしい生活条件を與えようとするところにある。そして、できるだけ資本家と労働者との利益の分配を公平にしようとするのである。資本家と労働者の関係をただ思いやりや愛情だけで解決しようとするのは実際には効果がない。もっと理性的な判断によって、だれが考えても公平だと思われる条件を考え出さなければ、また労働者の指導者がほんとうに組合員に対して民主的になり、自分の指導する集

國の力を結集し、意見を集めなければ、この問題は解決されないのである。

6. 不和の原因を除くためには——Ⅲお互に無知であってはならない

わが國は江戸時代に長い間鎖國をしていた。國民はもちろん、指導者階級もみな目かくしされているのも同然だった。そして、ちょうど閉め切ったへやのガスが一ぱいたまっているのに気がつかないように、國民全体に知らず知らずのうちに奇妙な偏見や先入観がしみこんでしまった。はじめて窓が開いて外氣にあたった時、そのような人たちはどんなふう窓の外のことを判断しただろうか。

万延元年(1860年)に日米通商條約の書類を交換するために、徳川幕府から使節團がアメリカ合衆國に派遣された。その時のことを副使村垣淡路守範正が詳しく日記に書き残している。はじめて踏む外國の土地。そこで出あうさまざまのできごと、それがどんなふうにかれの眼にうつったことだろう。



遣米日本使節團一行とアメリカ大統領との会見の図
(1860年5月17日、新見正興一行、ホワイトハウス前)
(開一ブランクレスリーは入館者(1860年6月2日)より)

アメリカ議會を見に行つた時のことが書いてある。「正面高き所に副統領、前に少し高き台に書記二人其の前圓く椅子を並べ、各々机書

籍を夥しく設け、凡そ四五十人も並みいて、其中一人立ちて大音声に罵り、手眞似などして狂人の如し。何か言い終りて又一人立ちて前の如し。何事なるやとといければ、國事を衆議し、各々意中をのこさず建白せしを副統領聞きて決するよし。……國政のやんごとなき評議なれど例のもも引掛筒袖にて大音に罵るさま、副統領の高き所に居るていなど、我が日本橋の魚市のさまによく似たりとひそかに語り合いたり。」また博物館に案内された時のことを次のように書いている。「廣き堂内左右に硝子を覆いたる棚に萬國の鳥獸虫魚數萬種あり。鳥は生けるが如く、大なるは白鳥位の鳥もかすかすあり。猿にも人体にひとしきものあり。手足長きもの數十種、蛇、鱉の類または蛭などは瓶に入れて焼酒につけたる、万すの數もあれば見るも心地あしきことなり。……こなたの隅に硝子を覆いたる中に、人骸の乾物三つあり、千年を経しものという、野晒の如きものにはなし、肉皮とも乾きて全骸立ちたり。男女といえど見わけがたし。天地間の万物を究理する故、かくの如きに至るといへど、鳥獸とひとしく人骸を並べて置くは言語に絶したり。則ち夷狄の名はのがれぬなるべし。」

きみたちは、議會がどうして必要であるかをすでに理解しているに違いない。またきみたちはミイラを博物館に並べているのを不思議だとは思ふまい。しかし、そのことが村垣淡路守にはわからなかったのである。

お互どうしの無知と無理解のために、どんなに多くの不必要な争いが生じたことだろう。無知の中でも一番危険なのは、自分の知っていることだけが眞理で、自分の考えはいつでも正しいと考えることである。自分の國だけが選ばれた國であるといううぬぼれもその一例である。しかし、もし人々が土地が変わり、社會が変われば、ものの考え方、判断の仕方自然に変わってくるものであることをお互に十分理解するならば、つまらないいざごはかなり少なくなるに違いない。

7. 正義と寛容

きみたちは、年若い青少年たちが理解のない事業主のために、きびしい見張りのもとで、肉体をすりへらしながら働いているというような話を聞くと、はげしい怒りの心にとらえられるだろう。それは正義に反していると思うだろう。それでは正義とはなんだろうか。きみたちはすでに人間はいろいろな基本的な願望を持っており、その願望を満足させるための基本的な権利を持っていることを学んだ。人から愛されたいという願い、人間らしく取り扱われたいという願い、とぼしくてからだの養いになるだけの食物を取りたいという願い、いいことをつつまず表現したいという願いなどがその数例である。正義に反するとは、この願望をむりやりにおさえつけるようなやり方である。以前には、どこの國でもこの人間の基本的な要求が十分に実現されなかった。そのため多くの人々が苦しいみじめな生活をしなければならなかった。わが國でも封建時代には「百姓は百姓らしく、町人は町人らしく」ということが要求されるだけで、「人間らしく」ということは問題にならなかった。明治になっても、たとえば言論の自由が制限されたり、働く青少年たちに保護の手がさしのべられなかったり、あるいは漠然とした疑いだけで警察に留置され、ひどいごうもんによって自白を強制されたりするようなことがあった。しかしやがて人間の基本的な権利を尊重しなければならないことが自覚されるようになった。そしてこのことが人間と人間との関係を調和的にする最も大切な条件であることがわかって来たのである。正義の精神が、個人にとっても、社会にとってもまた大きな社会の中の小さい集團にとっても、ますますたいせつなものだということが理解されて来たのである。

それとともに寛容の精神が尊重されるようになって来た。寛容とはお互の立場をよく理解し合い、自分の利益や考えだけを人に押しつけ

ないことである。もし、お互の立場が違っていても、しかも一つの結論を出さなければならない時には、よくお互に相談し、議論し合った上で、互に譲り合って一つの結論を出す。また一つの結論を出す必要がない時には、互に相手の立場を妨害したり、悪口をいい合ったりしないで、それぞれの立場を尊重し合うのである。議会で討議するのは前者の例で、宗教信仰の自由は後者の例である。

人類は長い間この寛容の精神を知らなかった。そのため自分と意見の違うものは、すべて敵として取り扱った。種族と種族との争いや、國民と國民との争いや、信仰の相違による争いなどが長い間人類を支配して来た。これはきみたちが世界の歴史を調べてみるとよくわかる。昔は種族や民族が違っていると、まるで人間どうしではないかのように、お互の間に理解がない場合が多かった。また宗教が違おうと互に異教徒と考え合って、その間に憎しみなどが生まれて、お互に争うこともあった。またそういう人々は、自分の町や部落や國民だけをとくに保護して、他の人々から特別扱いにする神を信じていたような場合もある。そうすると、そういう神々を信じている人々は、自然に他の人々に対して優越感を強くするようになり、狭い排他的精神が支配するようになる。

時代が進むにつれて、交通や通信が発達し、人々は狭い区域から出て、⁴廣い交際を持つようになるとともに、種族が違い、人種が違い、民族が違っていても、同じ人間としてお互に理解し合えるものだということがわかって来た。また文化や科学が進むにつれて、人間というのは、國が違っていても、共通の性質を持っているものだということがわかって来た。今から100年ぐらい前までは、未開人というのは、道德も生活の規則もない野蛮人だと見られていたが、社会についての科学的研究が進んで来ると、未開人も道德を持っていない人々ではなくて、いわゆる文明人とは違う道德や習慣を持っており、か

れらは、それによくしたがっていることがわかって来た。またこの地上には、髪の毛の形や色や皮膚の色などが違ういろいろの人種がいるけれども、最近では科学は、そういう外形には違いがあっても、その道徳的能力や知力には、もともとほとんど違いがないということを明らかにするようになって来た。こういう科学的な見方が廣く行われるようになると、人々の間には、次第に寛容の精神や人類愛が強くなって来る。

宗教もまた人類愛を深めるために大きな力になっている。キリスト教でも佛教でも、次第に人類を同胞と見る思想を強めることに大きな影響を與えるようになって来た。ドイツのシュワイツェルという音楽家で同時に学者である人は、第一次世界大戦の前に、アフリカの未開人の衛生状態、文化状態がひどく悪いことを聞いて、かれらを救おうとして、30才を過ぎてから医学を勉強して、アフリカの奥地深くはいて、アフリカ人の医療にしたがっていた。その仕事は全く自費で行われた。そうした民族を越えた人類愛は宗教的なものだった。



シュワイツェルとランバネネにおけるその住居

人類の不幸の中でも最大のものの一つは戦争である。そしてその戦

争の不幸を避ける最もよい道は、諸國民が人種や、ことばや、宗教などの違いを越えて、お互が相互に理解し合い愛し合うことである。それは、きみたちの胸の中に寛容の精神と、なにものによっても消すことのできない人類愛を育てることである。

研究すべき事項

1. 適材適所ということがいわれる。次の職業にはどんな才能や性格が必要だろうか。必要な才能や性格についてそれぞれ表を作ること。
技師 政治家 教師 看護婦 小説家 警官 車の運転手
2. 次の発明や発見は社会生活にどんな影響を與えただろうか。その一つについて文章を書くこと。
ラジオ 蒸気機関 原子力エネルギー コロンブスのアメリカ発見
3. 発明や発見を妨げるものにどんなことがあるだろうか。具体的な例を知っていたらあげてみたまえ。それを取りのぞくには、われわれはどうしたらよいか。勉強した上、学級に報告し、討議すること。
4. すべての自然科学の進歩は世界の各國民の間にいっそうよい生活、いっそう調和のある生活を作り出すのに貢献しているだろうか。学級で討議すること。
5. きみの尊敬している発明家・科学者・藝術家・宗教家・政治家の傳記を書くこと。それを学級で読んでさかせること。続いて討議を行うこと。きれいにそれを清書して学級文庫に入れること。
6. 村垣淡路守は、なぜアメリカの議會をこっけいだと感じたのだろうか。また、なぜ博物館を野蛮なもののように思ったのだろうか。それは日本の鎖國とどんな関係があっただろうか。調べること。
7. 討議をすることは、なぜ寛容の精神を発達させるのだろうか。模範的な討議の條件を学級で決め、それによってよい討議を行うこと。
8. 模範的な社会を作るにはどんな態度や行動が必要か。それについて学級で話し、その話にもとづいて討議を行うこと。

KD50.3-1-18a

社会科 18
個人と集團生活
Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 20 1949)

昭和 23 年 11 月 30 日 翻 刻 発 行
昭和 24 年 5 月 1 日 修正翻刻印刷
昭和 24 年 5 月 25 日 修正翻刻発行
(昭和 24 年 5 月 25 日 文部省検査済)

定 價 11 円 60 銭

著作権所有 (文 部 省)

翻 刻 発 行 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
兼 印 刷 者 東 京 書 籍 株 式 会 社
代 表 者 長 得 一

印 刷 所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東 京 書 籍 株 式 会 社 堀 船 工 場

発 行 所 東 京 書 籍 株 式 会 社

